

# 平成15年度 市内遺跡発掘調査に伴う 埋蔵文化財発掘調査報告書

*Kamitatara*

上良々良箱式石棺群(第2次)

*Nakagawaraemon-yama*

中川原町右衛門山地点

*Notahatta*

野田八田遺跡群(第3次)

*Kinoshita*

木ノ下遺跡

*Akagi*

赤木遺跡(第9次)

*Noji*

野地古墳

# 序 文

延岡市は、宮崎県の北部に位置する人口約12万4千人の中核都市として、豊かな自然、温暖な気候の中で個性ある風土や文化を育んできました。

古くは城下町として栄え、近年においても県北地域の教育文化・産業経済等の中心としての役割を担っており、特に工業は、県内随一、東九州地域においても有数の工業集積地として発展してきました。

現在においても、地域社会における本市の役割と責任はますます重要となってきていますが、その一方で、産業の停滞・人口の減少・高齢化等による都市の活力の低下が懸念される状況にあります。

このような中、県北地域の大きなネックとなっていた道路問題が、国道10号延岡道路の着手や国道218号北方延岡道路の着手など、高速道路網整備の事業着手や、これらに伴い市内でもインターへのアクセス道路の整備が進んでおります。また、宮崎県北地方拠点都市地域の指定、さらに念願であった四年制大学「九州保健福祉大学」の立地や新しい学部の創設は、広域的な視点に立った交流と連携による新たなまちづくりを展開するための大きな契機となっています。

本年度は、大規模な公共工事や民間開発はなかったものの、小規模な公共・民間開発が行われています。市教育委員会では開発事業等の計画に際して、埋蔵文化財の確認調査等を実施しており、本書はその報告書であります。

本書が埋蔵文化財への理解を深める一助となることを願うとともに、研究資料としてご活用いただければ幸いです。

最後になりますが、発掘調査にあたり県教育委員会文化課をはじめ、地権者の方々にご協力得ました。記して感謝いたします。

平成16年3月31日

延岡市教育委員会  
教育長 牧野哲久

# 例 言

1. 本書は延岡市教育委員会が国・県補助を受けて、平成15年度に実施した市内遺跡発掘調査報告書である。
2. 本年度は、中川原町右衛門山地点、野田八田遺跡群(第3次)、木ノ下遺跡、赤木遺跡(第9次)、延岡城内遺跡(第10次)の発掘調査を実施した。
3. 昨年度末に調査した上多々良箱式石棺群(第2次)を巻頭に報告し、木ノ下遺跡調査により確認した円墳を野地古墳として巻末に報告する。
4. 本書に使用した遺構・遺物の実測・トレース・図面作成は、尾方農一、高浦 哲、敷石サヨ子、野脇信子、藤本千鳥、山本敬子が行った。
5. 現場での写真撮影は各担当者が、遺物の写真撮影は高浦が行った。
6. 方位は磁北を示し、本書に使用したレベルはすべて海拔高である。
7. 出土遺物は内藤記念館で保管しており、今後展示公開の予定である。



Fig.1 延岡市位置図

## 本文目次

### 第1章 はじめに

1. はじめに…………… 1～2

### 第2章 調査の記録

1. 上多々良箱式石棺群(第2次)…………… 3
2. 中川原町右衛門山地点…………… 4
3. 野田八田遺跡群(第3次)…………… 5～7
4. 木ノ下遺跡…………… 8～11
5. 赤木遺跡(第9次)…………… 12～15
- 野地古墳…………… 17～43

## 挿 図 目 次

- |                                  |    |
|----------------------------------|----|
| Fig.1 延岡市位置図……………                | 2  |
| Fig.3 上多々良箱式石棺群(第2次)位置図……………     | 3  |
| Fig.5 中川原町右衛門山地点位置図……………         | 4  |
| Fig.7 野田八田遺跡群(第3次)位置図……………       | 5  |
| Fig.9 野田八田遺跡群(第3次)出土遺物実測図……………   | 6  |
| Fig.11 木ノ下遺跡調査区配置図……………          | 8  |
| Fig.13 木ノ下遺跡T1・2・3・5土層断面図……………   | 10 |
| Fig.15 赤木遺跡(第9次)位置図……………         | 12 |
| Fig.17 赤木遺跡(第9次)調査区配置図……………      | 13 |
| Fig.19 赤木遺跡(第9次)出土遺物実測図……………     | 15 |
| Fig.21 野地古墳周辺遺跡分布図……………          | 20 |
| Fig.23 野地古墳調査区配置図……………           | 23 |
| Fig.25 野地古墳主体部A実測図……………          | 25 |
| Fig.27 野地古墳主体部A出土遺物実測図1……………     | 27 |
| Fig.29 野地古墳主体部A出土遺物実測図3……………     | 29 |
| Fig.31 野地古墳周溝内出土遺物実測図……………       | 31 |
| Fig.2 平成15年度市内遺跡発掘調査地分布図……………    | 2  |
| Fig.4 平成10年度上多々良箱式石棺群調査地位置図…………… | 3  |
| Fig.6 中川原町右衛門山地点調査区配置図……………      | 4  |
| Fig.8 野田八田遺跡群(第3次)調査区配置図……………    | 5  |
| Fig.10 木ノ下遺跡位置図……………             | 8  |
| Fig.12 木ノ下遺跡検出遺構分布図……………         | 9  |
| Fig.14 木ノ下遺跡出土遺物実測図……………         | 11 |
| Fig.16 赤木遺跡(第9次)基本土層柱状図……………     | 12 |
| Fig.18 赤木遺跡(第9次)T2・3検出周溝実測図…………… | 14 |
| Fig.20 野地古墳位置図……………              | 19 |
| Fig.22 野地古墳周辺古墳分布図……………          | 21 |
| Fig.24 野地古墳検出遺構分布図……………          | 24 |
| Fig.26 野地古墳主体部B実測図……………          | 26 |
| Fig.28 野地古墳主体部A出土遺物実測図2……………     | 28 |
| Fig.30 野地古墳主体部B出土遺物実測図……………      | 30 |

## 表 目 次

- |                              |       |
|------------------------------|-------|
| 第1表 平成15年度市内遺跡発掘調査地一覧表……………  | 1     |
| 第3表 野地古墳主体部A出土鉄製品観察表……………    | 32    |
| 第5表 野地古墳主体部A・B出土玉類観察表……………   | 34    |
| 第2表 野田八田遺跡群(第3次)出土遺物観察表…………… | 7     |
| 第4表 野地古墳主体部B出土鉄製品観察表……………    | 33    |
| 報告書抄録……………                   | 44～45 |

## 写真図版目次

- |                                    |    |
|------------------------------------|----|
| PL.1 上多々良箱式石棺群(第2次)調査風景……………       | 3  |
| PL.3 野田八田遺跡群(第3次)調査風景……………         | 6  |
| PL.5 木ノ下遺跡調査風景……………                | 11 |
| PL.7 木ノ下遺跡出土遺物……………                | 11 |
| PL.9 赤木遺跡(第9次)出土遺物……………            | 15 |
| PL.11 野地古墳遺構検出状況……………              | 38 |
| PL.13 野地古墳主体部A検出状況……………            | 39 |
| PL.15 野地古墳主体部A遺物出土状況1……………         | 40 |
| PL.17 野地古墳調査地近景……………               | 40 |
| PL.19 野地古墳主体部A勾玉・小玉出土状況……………       | 40 |
| PL.21 野地古墳主体部B遺物出土状況1……………         | 41 |
| PL.23 野地古墳主体部B遺物出土状況3……………         | 41 |
| PL.25 野地古墳周溝土層断面……………              | 41 |
| PL.27 野地古墳主体部A出土遺物……………            | 42 |
| PL.29 野地古墳主体部A・B出土遺物……………          | 43 |
| PL.2 中川原町右衛門山地点調査風景……………           | 4  |
| PL.4 野田八田遺跡群(第3次)出土遺物……………         | 7  |
| PL.6 木ノ下遺跡主体部A検出状況……………            | 11 |
| PL.8 赤木遺跡(第9次)T3周溝検出状況……………        | 12 |
| PL.10 野地古墳遠景……………                  | 22 |
| PL.12 野地古墳主体部A・B検出状況……………          | 38 |
| PL.14 野地古墳主体部B検出状況……………            | 39 |
| PL.16 野地古墳主体部A遺物出土状況2……………         | 40 |
| PL.18 野地古墳調査風景……………                | 40 |
| PL.20 野地古墳主体部A土層断面……………            | 40 |
| PL.22 野地古墳主体部B遺物出土状況2……………         | 41 |
| PL.24 野地古墳主体部B土層断面……………            | 41 |
| PL.26 野地古墳周溝内遺物出土状況……………           | 41 |
| PL.28 野地古墳主体部B出土遺物……………            | 42 |
| PL.30 野地古墳周溝内出土遺物及び主体部A・B出土玉類…………… | 43 |

# 第1章 はじめに

## 1. はじめに

延岡市は、日向灘に面した宮崎県の北部に位置し、東経131度40分03秒、北緯32度34分43秒にあり、東西に27.6km、南北に26.4kmの市域を占め、面積は283.82km<sup>2</sup>である。人口は12万3千人を数え、宮崎県北部の中核都市であり、また県下最大の工業集積地である。

これまで工業都市として認識されてきた本市であるが、「内藤家伝来の能面展」や「のべおか天下一薪能」、「城山かぐら祭」等を開催し、全国に文化都市「のべおか」を情報発信している。さらに本年は市制施行70周年を迎え、様々なイベントが開催され、特にドイツ連邦共和国で開催された「能面展」「かぐら祭り」は大好評を博し、世界へ「のべおか」の情報発信をすることができた。

現在の延岡市は、念願だった4年制大学「九州保健福祉大学」や薬学部の新設、「国道10号延岡道路」の着手、「国道218号北方延岡道路」など、これまでの大きな課題であった道路問題に対しても大きく前進している。本年は大規模な公共・民間開発はなかったもの、小規模な開発事業が行われそれら開発事業と埋蔵文化財保護との調整資料を得るために下記の5箇所を確認・試掘調査を実施した。

今年度の報告書は、昨年度に調査し次年度報告とした、上多々良箱式石棺群(第2次)を巻頭に、木ノ下遺跡で確認した古墳(野地古墳)の調査報告を巻末にて行う。また、延岡城内遺跡(第10次)は年度末調査のため次年度報告とする。

遺 跡 名	所在地(延岡市)	調査原因	調査面積	調 査 期 間
中川原町右衛門山地点	中川原町	病院建設	133.0m <sup>2</sup>	平成15年4月22日～4月30日
野田八田遺跡群(第2次)	野田町字八田	市道改良工事	40.0m <sup>2</sup>	平成15年9月16日～10月2日
木ノ下遺跡	野地町字木ノ下	急傾斜地崩壊対策	34.0m <sup>2</sup>	平成15年10月7日～11月8日
赤木遺跡(第9次)	舞野町字赤木	駐車場整備	20.0m <sup>2</sup>	平成15年12月1日～12月9日
延岡城内遺跡(第10次)	天神小路字天神小路	宅地造成	200.0m <sup>2</sup>	平成16年2月2日～2月24日
野地古墳	野地町字木ノ下	急傾斜地崩壊対策	55.0m <sup>2</sup>	平成15年11月26日～平成16年1月10日

第1表 平成15年度 市内遺跡発掘調査地一覧表

## 2. 調査の組織

調査主体	延岡市教育委員会		
	教 育 長	牧 野 哲 久	
	文化課長	渡 邊 博 吏	
	課長補佐兼文化振興係長	黒 木 育 朗	
	文化財係長	原 岡 秀 樹	
庶務担当	文化課主査	野 下 美智江	
調査担当	文化課主任主事	尾 方 農 一	
	文化課主任主事	高 浦 哲	

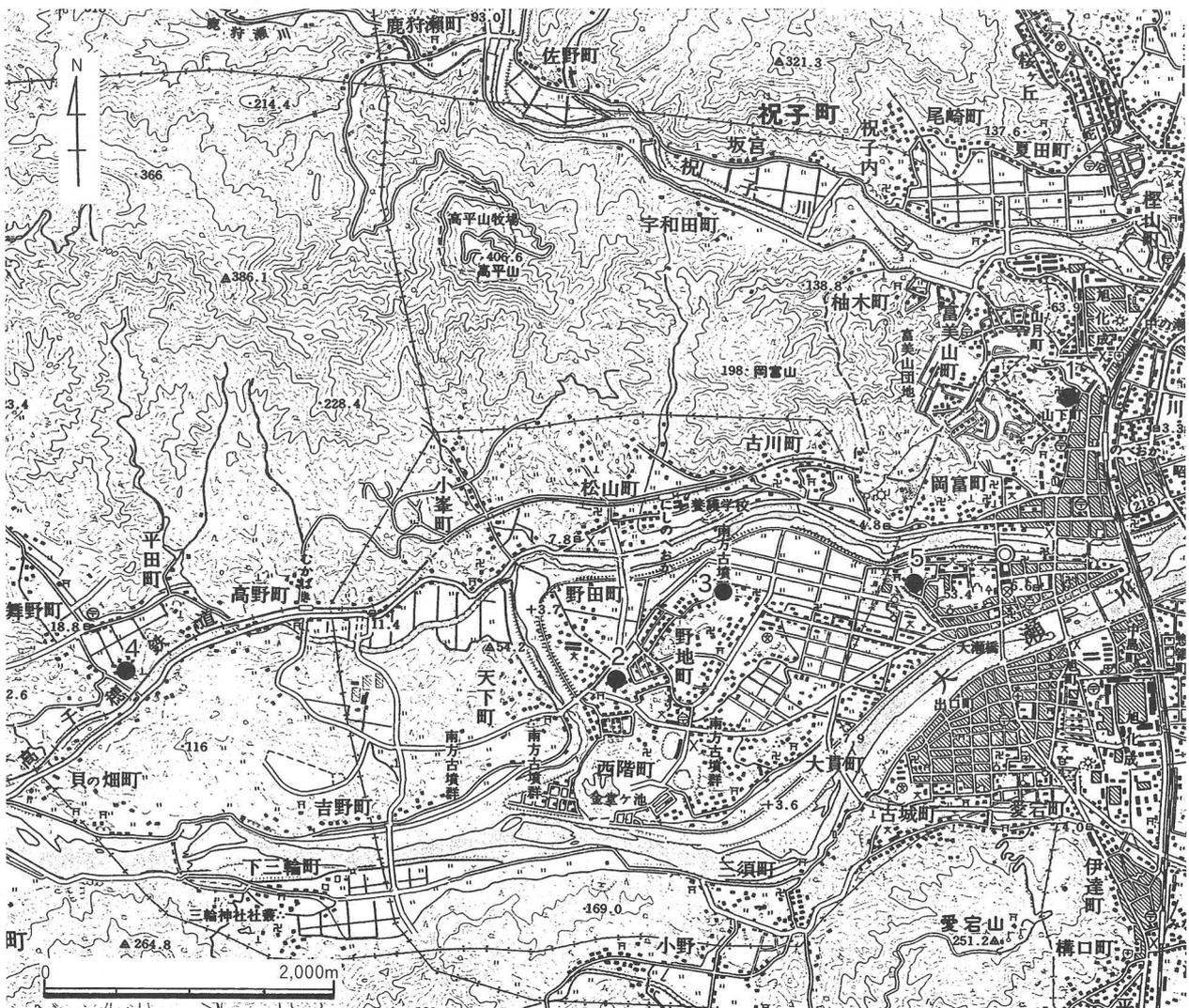
発掘作業員

安藤登美子、甲斐カツキ、甲斐三千代、甲斐如高、稼農末治、川名千代子、久保利男、酒井清子、酒井正志、中岩房子、中川イツ子、林田裕子、松崎辰磨

資料整理

敷石サヨ子、野脇信子、藤本千鳥、山本敬子

発掘調査の事前協議等において、市土木課に御協力をいただいた。また、土地所有者及び関係者の旭化成株式会社延岡支社、落合設計事務所、(有)フジタカ建設、なるたき保育園、(有)タカハマ宅建、永田 勲氏、永田義典氏の方々には、調査の課程において便宜をはかっていただいた。記して感謝します。



- |                 |                 |
|-----------------|-----------------|
| 1. 中川原町右衛門山地点   | 2. 野田八田遺跡群(第3次) |
| 3. 木ノ下遺跡        | 4. 赤木遺跡(第9次)    |
| 5. 延岡城内遺跡(第10次) |                 |

Fig. 2 平成15年度市内遺跡発掘調査地分布図 (1/50,000)

# 1. 上多々良箱式石棺群 (第2次)

所在地 延岡市岡富町841-1外  
調査原因 区画整理事業  
調査期間 030303~030324

調査面積 32.6m<sup>2</sup>  
担当者 高浦  
処置 協議(本調査)

## (1)位置と環境

当遺跡は、市の北部に位置する高平山から、南の五ヶ瀬川に向かって派生する舌状丘陵の南端部付近に位置する。周辺には古墳時代の遺跡が数多く確認されており、調査丘陵の裾部には2基の箱式石棺が露出している。この他、平成10年度に実施した区画整理事業に伴う事前の確認調査では、丘陵の尾根筋に沿って3基の箱式石棺と、土器集中部、また主体部は確認できなかったが、鉄剣や土器片が出土する地点など、遺構の存在する可能性が高い7ヶ所を確認している。

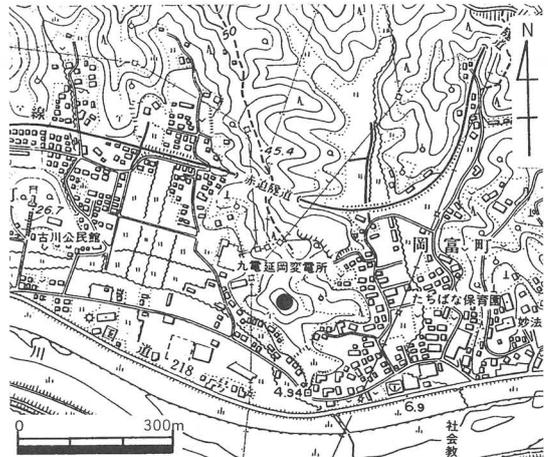


Fig. 3 上多々良箱式石棺群(第2次)位置図  
(1/15,000)

## (2)調査の概要

今回の調査は、今後事業が予定されている区画整理事業の本調査範囲の絞り込み及び経費の積算の基礎資料を得るため、また新しい遺構の存在を確認するために、平成10年度に実施した調査地点①~⑥周辺を重点的に行った。前回の調査で①地点では土器の集中部を、②地点では箱式石棺1基を、④地点では箱式石棺1基を、⑥地点では箱式石棺1基を確認している。調査はそれらの地点を中心に13ヶ所のトレンチを設定し実施した。その結果、新しい遺構・遺物の検出はできなかった。

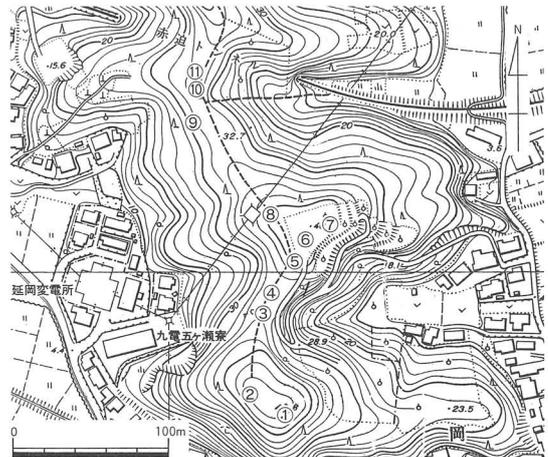


Fig. 4 平成10年度上多々良箱式石棺群調査地位置図  
(1/5,000)

## (3)検出遺構

なし。

## (4)出土遺物

なし。

## (5)まとめ

今回の調査では新しい発見はなかったものの、本調査範囲の絞り込みができ、一応の成果を挙げた。



PL.1 上多々良箱式石棺群(第2次)調査風景

## 2. 中川原町右衛門山地点

所在地 延岡市中河原町2丁目3-1  
調査原因 病院建設  
調査期間 030422～030430

調査面積 133.0m<sup>2</sup>  
担当者 高浦  
処置 調査後破壊

### (1)位置と環境

調査地は、JR延岡駅の北西部に位置し、延岡市立旭小学校の南に隣地する。ここは、市の中心にある今山の北東端裾部にあたるため、微高地を呈している。調査前は、旭化成工業株式会社延岡支社の社宅が建ち並んでいた。

調査地の周辺には、平成7年度に調査された「上ノ坊古墳」が存在した丘陵があり、木棺直葬の主体部からは、全国的に類例のないつくりの三角板革綴短甲が出土している。また、調査地の西に立つ善正寺には、延岡に初めて学塾を開いた「私学の祖」、また優れた医術をもたらした「郷土の医祖」である渡辺正庵の墓が建立されている。

### (2)調査の概要

調査地は開発面積が広いことから重機によるトレンチ法を採用し、土層観察と遺構検出に目的とし8ヶ所に設定し実施した。調査により厚いところで約2mの客土を確認し、その下層から西から延びる丘陵の地山を検出した。客土は旭化成の社宅建築の際に持ち込まれたもので、調査地は盛土による造成が行われたと判断された。

### (3)検出遺構

なし。

### (4)出土遺物

なし。

### (5)まとめ

今回の調査では、埋蔵文化財は確認されなかったものの、今山北東の丘陵地形を伺い知る一つの資料が得られた。

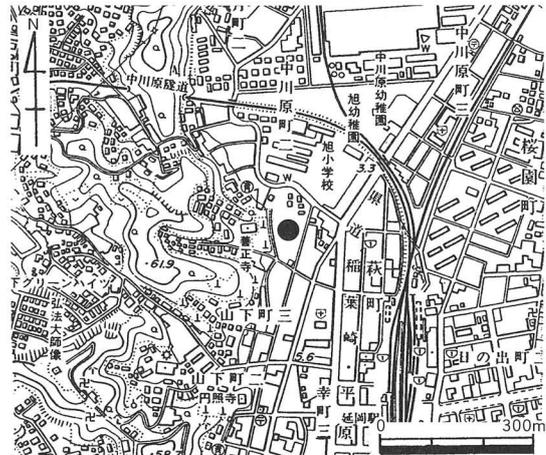


Fig. 5 中川原町右衛門山地点位置図  
(1/15,000)



Fig. 6 中川原町右衛門山地点調査区配置図  
(1/2,500)



PL.2 中川原町右衛門山地点調査風景

### 3. 野田八田遺跡群 (第3次)

所在地 延岡市野田町5280番地  
 調査原因 市道改良工事  
 調査期間 030916～031002

調査面積 40.0m<sup>2</sup>  
 担当者 高浦  
 処置 調査後破壊

#### (1)位置と環境

当遺跡は、市街地からの西方に約2.5kmにある、水田と畑地が広がる地帯の一角にある低丘陵地に位置する。この丘陵には、周辺に展開する国史跡南方古墳群の一つである第37号墳が所在している。37号墳は墳丘が消滅した古墳と考えられ、阿蘇溶結凝灰岩製の家形石棺が露出している状態にある。

南方古墳群の調査の歴史は古く、大正年間～昭和初期に一部が行われており、記録によると、その当時からすでに石棺が露出している状態であったと記載されている。37号墳は未調査のため、本当に古墳があったのか、或いは石棺が別地より持ち込まれたのか謎の多い古墳であるが、非常に大形の石棺であることから、貴重な資料として取り扱われている。その他、この丘陵と以前連続していた西の丘陵は、昭和53年度に市道西階通線道路改良に伴う発掘調査が行われ、弥生時代の住居跡や土坑が確認されている。

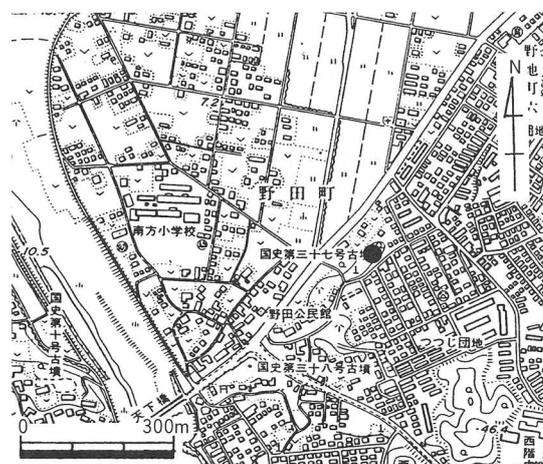


Fig. 7 野田八田遺跡群(第3次)位置図 (1/15,000)

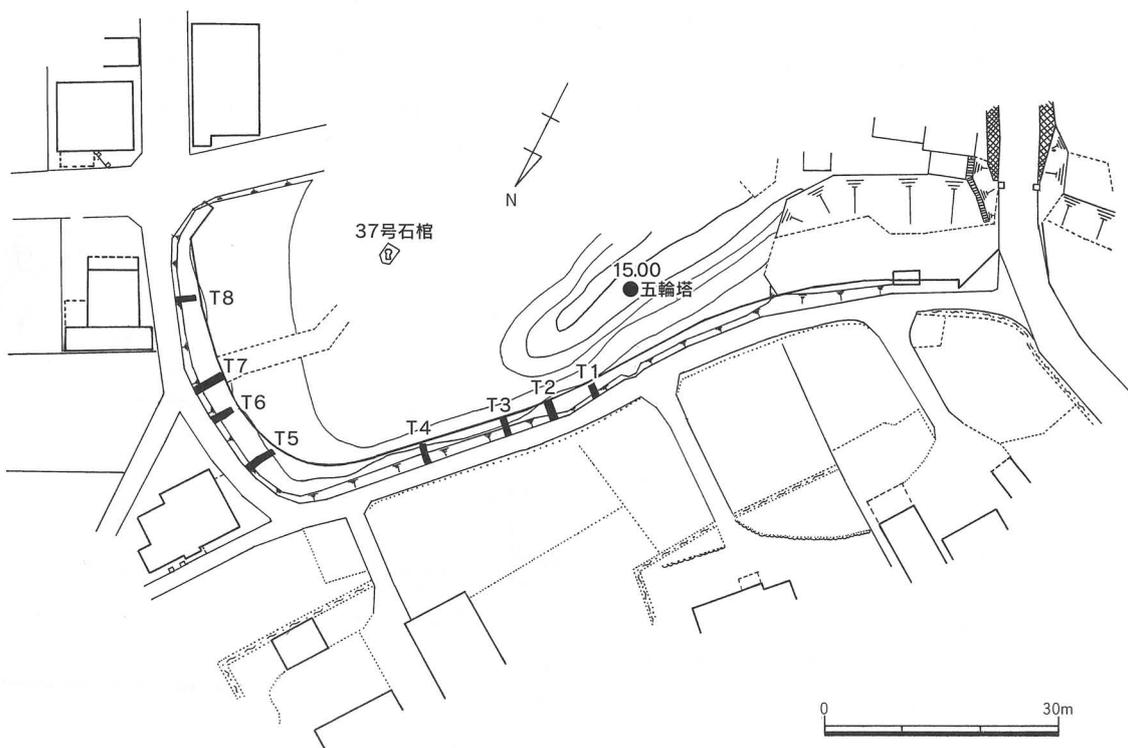


Fig. 8 野田八田遺跡群(第3次)調査区配置図 (1/1,000)

## (2)調査の概要

道路改良工事は、37号墳の石棺が露出している丘陵を、最大で約5m削平し道路を広げる計画であった。このことから調査は、重機と人力により掘削予定地に8ヶ所のトレンチを設定し、土層観察と37号墳に関連する遺構検出を目的に実施した。また、調査前の踏査から、丘陵法面に数カ所の阿蘇溶結凝灰岩が露出している様子が伺えた。横穴等の遺構の存在が考えられたため、その場所については表面的に掘り下げ調査を実施した。

調査の結果、トレンチ1～3から道路に沿って阿蘇溶結凝灰岩の石垣列が検出された。周辺の聞き取り調査から、この石垣は丘陵崩壊防止のために築いた跡で、法面に露出した凝灰岩もこの石垣の跡であることが明らかとなった。最大の関心であった37号墳に伴う遺構については、何も検出することができず謎の解明には至らなかった。この他、工事範囲外の丘陵の踏査を行ったところ、5基の五輪塔を確認した。時期は不明だが、寺院があったとされそれに関連するものと考えられた。



PL.3 野田八田遺跡群(第3次)調査風景

## (3)検出遺構

近代の石垣跡。

## (4)出土遺物

調査区内より若干の陶磁器片が出土した。1はトレンチ2出土の陶器の碗である。18C後半の瀬戸・美濃とみられる。2はトレンチ4出土の磁器の碗である。17C中頃の肥前有田のものである。3はトレンチ2出土の磁器の染付蓋である。外面に山水文とみられる染付が施される。17C後半の肥前有田のものである。4はトレンチ5出土の磁器の染付鉢である。見込に五弁花、内面に花文様、

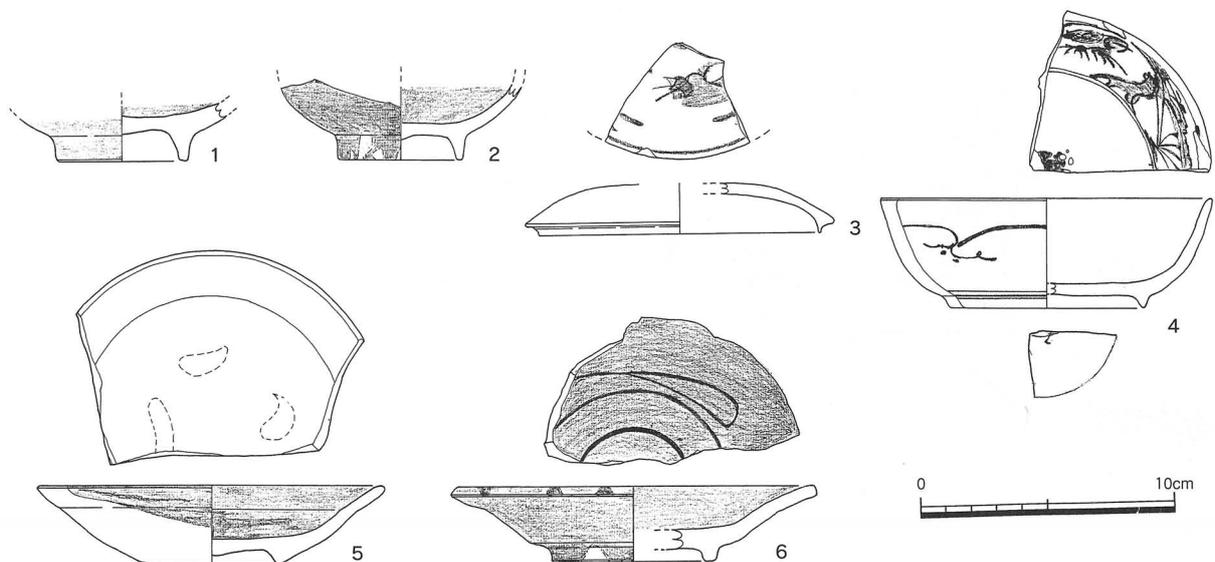


Fig. 9 野田八田遺跡群(第3次)出土遺物実測図 (1/3)

外面には唐草文が施される。18Cの肥前有田のものである。5は表採資料で、陶器の皿である。見込に砂目跡が残る。16末～17C初の唐津のものである。6はトレンチ2出土の青磁の皿である。内面に陰刻文を施す。16Cの中国龍泉窯のものである。

(5)まとめ

今回の調査では、37号墳に関連する遺構やその他の新しい遺構は確認されなかった。37号墳の規模を考えると、今回の調査地はやや距離が離れているためではないかと思われる。今後も残る丘陵の取扱に注意を要していかなければならない。

No.	種別	器種	出土地点	法 量			形態及び文様	産地・時期
				口径・長	底径・幅	器高・厚		
1	陶器	碗	T-2		5.2		貫入、畳付無釉	瀬戸・美濃? 18C後?
2	磁器	碗	T-4		4.8		高台内無釉、灰釉を施釉	肥前有田 17C中
3	磁器	染付蓋	T-2	12.2			外面山水文?	肥前有田 17C後
4	磁器	染付鉢	T-5	12.9	7.7	4.4	見込五弁花文、周囲花文様 外面唐草文、畳付小砂付着	肥前有田 18C
5	陶器	皿	表採	5.1		3.1	見込砂目跡、三ヶ月高台、 灰釉を施釉	唐津 16C末～17初
6	青磁	皿	T-2	13.4	5.3	3.0	輪花皿、内面陰刻文、高台 内無釉	中国龍泉窯 16C

第2表 野田八田遺跡群(第3次)出土遺物観察表



PL.4 野田八田遺跡群(第3次)出土遺物

## 4. 木ノ下遺跡

所在地	延岡市野地町4丁目3268-1	調査面積	34.0m <sup>2</sup>
調査原因	急傾斜地崩壊対策	担当者	高浦
調査期間	031007~031108	処置	本調査

### (1)位置と環境

当遺跡は、市街地から約1.9km 西方にある、標高約20mの丘陵上に位置する。この丘陵上には国史跡南方古墳群第34号~36号、41号墳(野地支群)が点在している。この古墳群は前方後円墳1基、円墳3基で構成されており、すべて未調査の古墳である。また同丘陵には、昭和49年に文化財定期巡回中に確認された円墳1基(未指定古墳)が所在している。

当丘陵は、宅地化による掘削が行われたため丘陵の崩壊が著しく、昨年県と市で年次的に急傾斜工事を実施しており、それに先行する形で埋蔵文化財の確認調査が行われている。昨年は県文化課による工事範囲内の調査が行われ、その際に未指定古墳

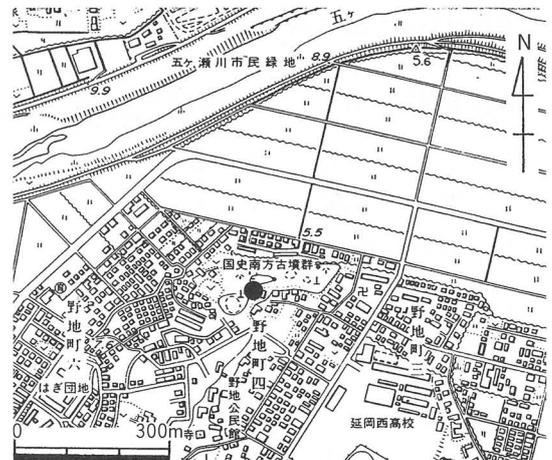


Fig.10 木ノ下遺跡位置図(1/15,000)

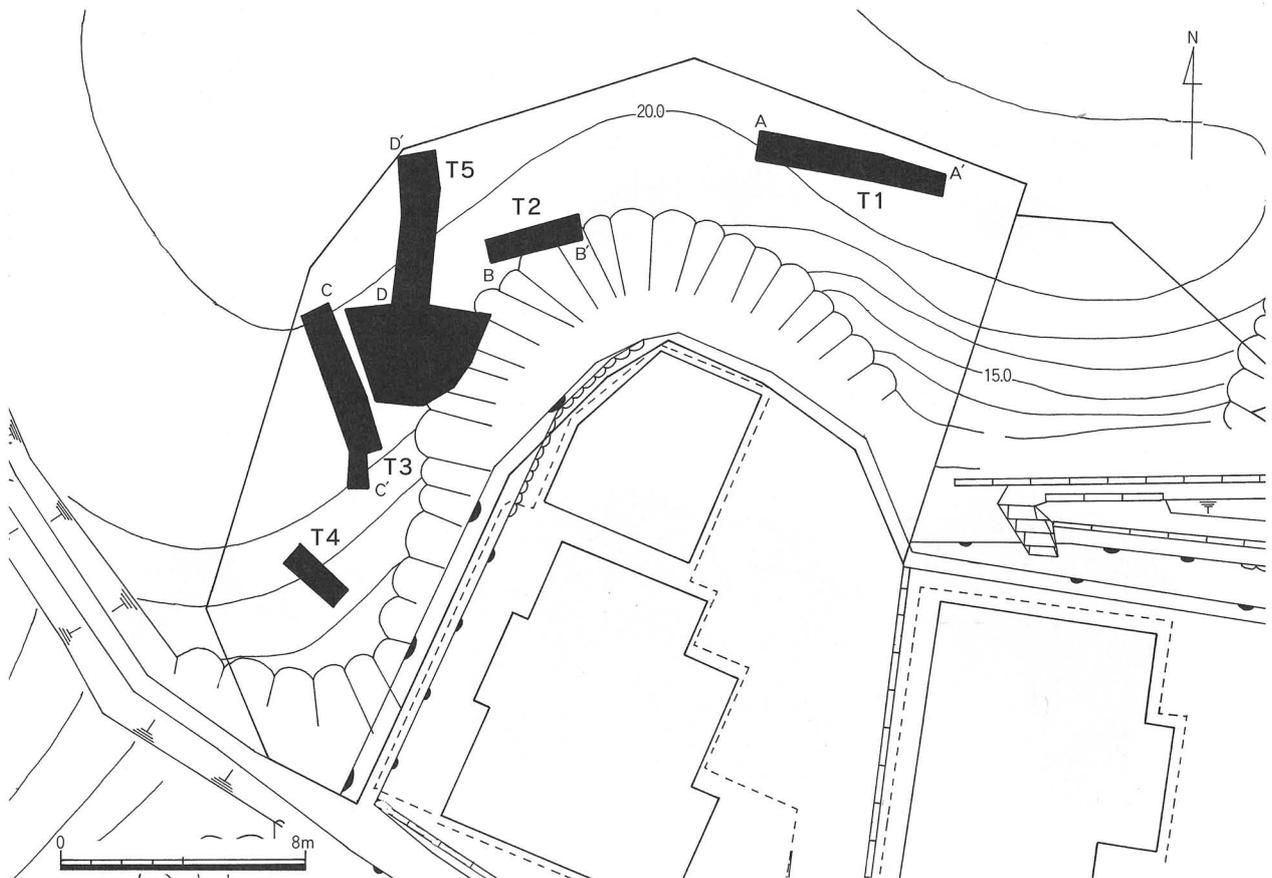


Fig.11 木ノ下遺跡調査区配置図(1/250)

周辺の調査が行われたが、古墳として裏付ける結果は得られなかった。今回の工事予定地の丘陵は、この未指定墳から西に延び、なだらかに南に向かい傾斜する地点で一面竹林となっていた。事前の踏査では墳丘等のマウンドは確認されていなかった。

(2)調査の概要

調査は土層観察と遺構検出を目的にトレンチ法を採用し、工事予定地に4ヶ所のトレンチを設定した。トレンチの一つは未指定古墳にかかるよう設定した。調査地は一面竹林が林立していたため、まず調査区の確保のために伐採から実施した。

調査の結果、未指定古墳に設定したトレンチ1からは、表土下約30cmから当丘陵を形成する段丘礫層が検出され、昨年度実施された県文化課の調査結果と同様に古墳を裏付ける結果は得られなかった。丘陵斜面地の南裾部に設定したトレンチ4でも、地表下約90cmから段丘礫層が確認され、埋蔵文化財は確認されなかった。丘陵尾根筋からやや南に下がった位置に設定したトレンチ2からは、遺物の出土はなかったものの段丘礫を掘り込んだ落ち込みが確認された。同じく丘陵尾根筋からやや下った開発範囲最西部に設定したトレンチ3からは、刀子、鉄鏝が出土した。この遺物の出土から土層を精査したところ、大きく掘り込まれた遺構を検出した。

トレンチ2、3の結果から、調査地に何らかの遺構の存在が予想されたため、遺構の性格を掴むためトレンチ3周辺を拡張した。この調査から、墳丘はすでに消滅していたが古墳の主体部（主体

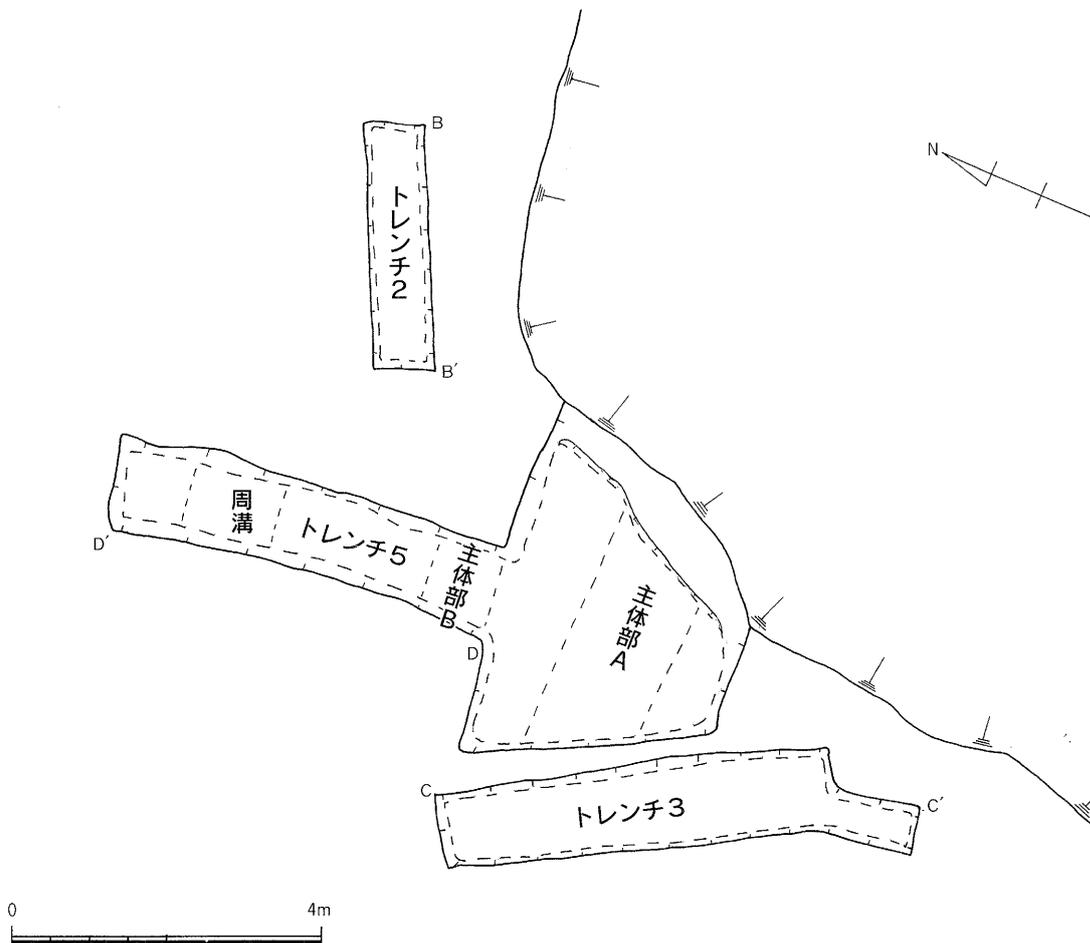


Fig.12 木ノ下遺跡検出遺構分布図 (1/100)

部A)のプランを検出することができた。また、周溝及び古墳の規模を確認するため、検出した主体部に直行する形でトレンチ5を設定し調査を行った。その結果、北側に巡る周溝を検出するとともに、検出した主体部Aの北側でもう一つの主体部(主体部B)を検出した。このことから、調査地に墳丘は消滅しているものの、二つの主体部を持ち周溝を伴う古墳が存在することが明らかとなった。

(3)検出遺構

直径約12mの円墳1基を検出した。墳丘はすでに消滅していたが、主体部を2つ持つ円墳であった。周溝の一部は隣接する民家建築の際に丘陵が掘削されたため破壊されていた。

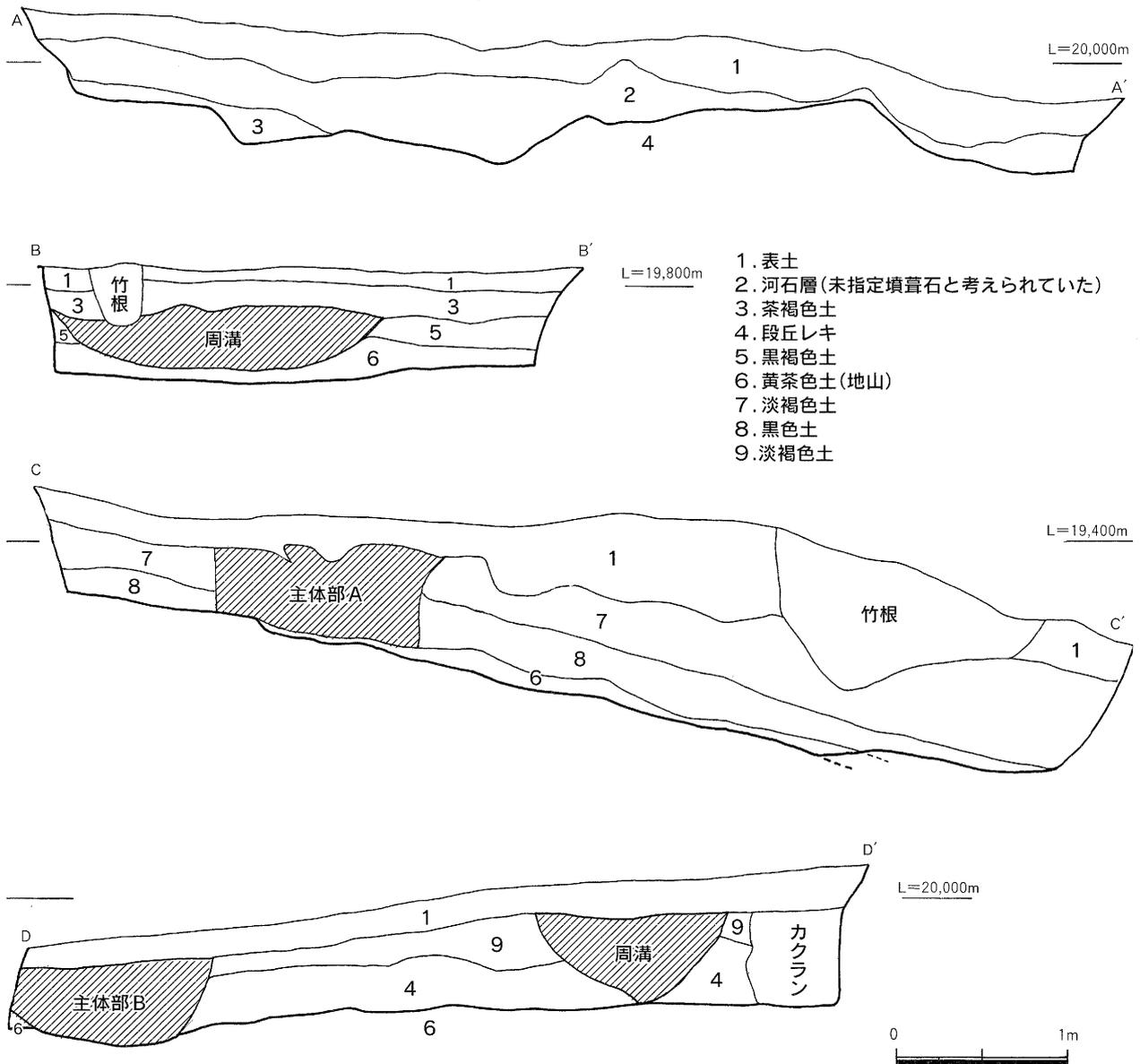


Fig.13 木ノ下遺跡T1・2・3・5土層断面図(1/40)

(4)出土遺物

トレンチ3より鉄鍬、刀子が出土した(主体部A)。また、トレンチ5から鉄斧、ヤリガンナ、鉄鍬が出土した(主体部B)。同じくトレンチ5で検出した周溝内より土師質の土器片が出土している。

1は鉄鍬である。長頸鍬の鍬身部で頸部から欠損している。刃部は三角形を呈す。現存長5cm、刃部幅0.9cm、頸部厚0.3cmを測る。刃部厚は錆が著しいため不明である。2は刀子の柄部付近である。一部木質が遺存するが、錆が著しい。現存長5.6cm、刃部幅1.6cm、刃部鍬厚は0.3cmを測る。

(5)まとめ

今回の調査から開発予定地に、墳丘と周溝の一部は消失しているが、主体部2ヶ所を伴う円墳1基が確認された。また、昨年と今回調査を実施した未指定墳は古墳として考えるには難しいと思われる結果が得られた。

今回の調査で確認された円墳は、未指定であるが立地から周囲に点在する南方古墳群の一角を成すものと判断された。そこで保存等について担当課と協議したところ、ここは急傾斜地であり民家が隣接していることから本調査による記録保存措置をとることとなった。

なお、確認した古墳を野地古墳と名称し、当報告書巻末に報告している。



PL.5 木ノ下遺跡調査風景



PL.6 木ノ下遺跡主体部A検出状況

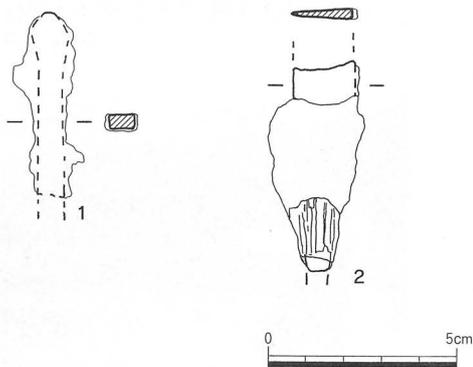


Fig.14 木ノ下遺跡出土遺物実測図  
(1/2)



PL.7 木ノ下遺跡出土遺物

## 5. 赤木遺跡 (第9次)

所在地 延岡市舞野町1480-2  
 調査原因 駐車場整備  
 調査期間 031201~031209

調査面積 20.0m<sup>2</sup>  
 担当者 尾方  
 処置 保存

### (1)位置と環境

当遺跡は、行膝山から南に派生したものが、さらに東に向かって派生する舌状丘陵で、東に分岐する付け根部分付近に位置する。丘陵は五ヶ瀬川支流の行膝川右岸に位置し、標高は約49mを測る。南には国道218号線と高千穂鉄道が東西に走っている。

この丘陵上には旧石器時代から古墳時代の遺跡が数多く分布している。赤木遺跡は1985年、ナイフ形石器を中心とする赤木第1文化層、細石器を中心とする赤木第2文化層の2つの文化層が確認された調査を皮切りに、確認調査を含め7次にわたる調査が実施されてきた。現在も一般国道218号北方延岡道路建設に伴う発掘調査(第8次)が宮崎県埋蔵文化財センターにより実施されており、弥生時代の住居跡や縄文早期の集石遺構、多くの遺物が出土している。

また、点在する古墳群は国史跡南方古墳群と称され、調査地には第21、22、23号墳が隣接している。2次調査では21号墳の範囲確認調査が実施され周溝が確認されている。

### (2)調査の概要

調査は周溝確認による22号墳の範囲確認を第一の目的として実施した。調査は重機によるトレンチ法を採用し、調査可能な場所4ヶ所に古墳に直行する形で設定した。調査地はこれまでの周辺調査データから非常に良好な土層堆積であることが予想された。調査地の基本層序は①表土、②黒色土、③アカホヤ(縄文後期以降)、④黒色土(縄文早期)、⑤暗褐色粘質土である。(⑤以下旧石器時代の包含層となるが、周溝確認を第一の目的としたため下層の調査は実施しなかった。)

調査では①、②層の除去後、アカホヤ面を検出し、この面を掘り込んだ周溝を検出した。

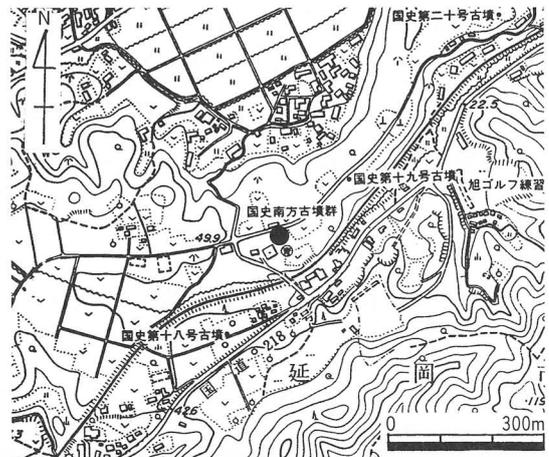


Fig.15 赤木遺跡(第9次)位置図(1/15,000)

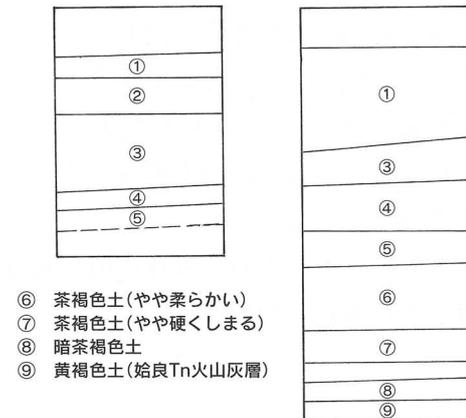


Fig.16 赤木遺跡(第9次)基本土層柱状図(1/20)  
 (左 第9次・右 第7次)



PL.8 赤木遺跡(第9次)T3周溝検出状況

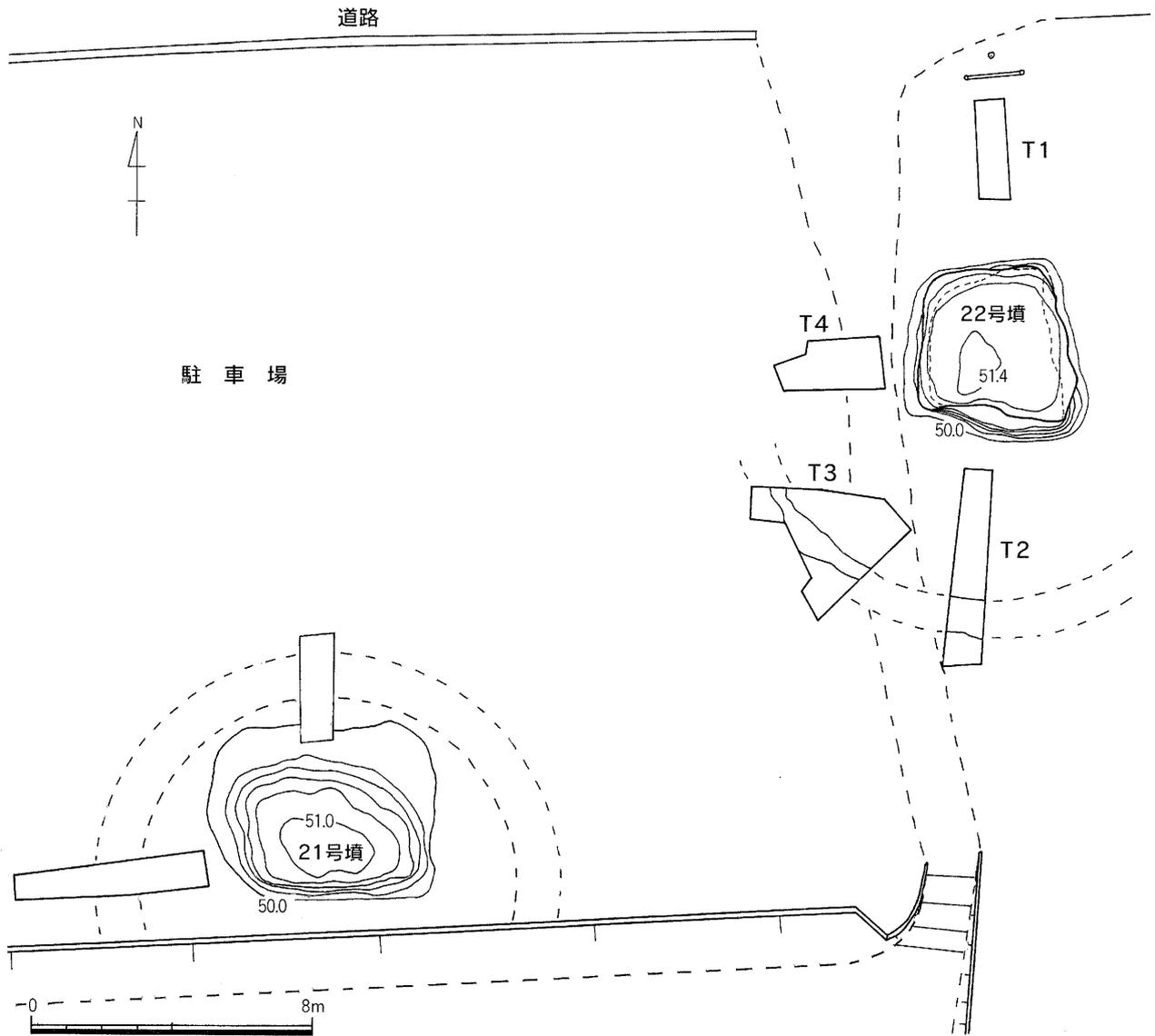


Fig.17 赤木遺跡(第9次)調査区配置図 (1/200)

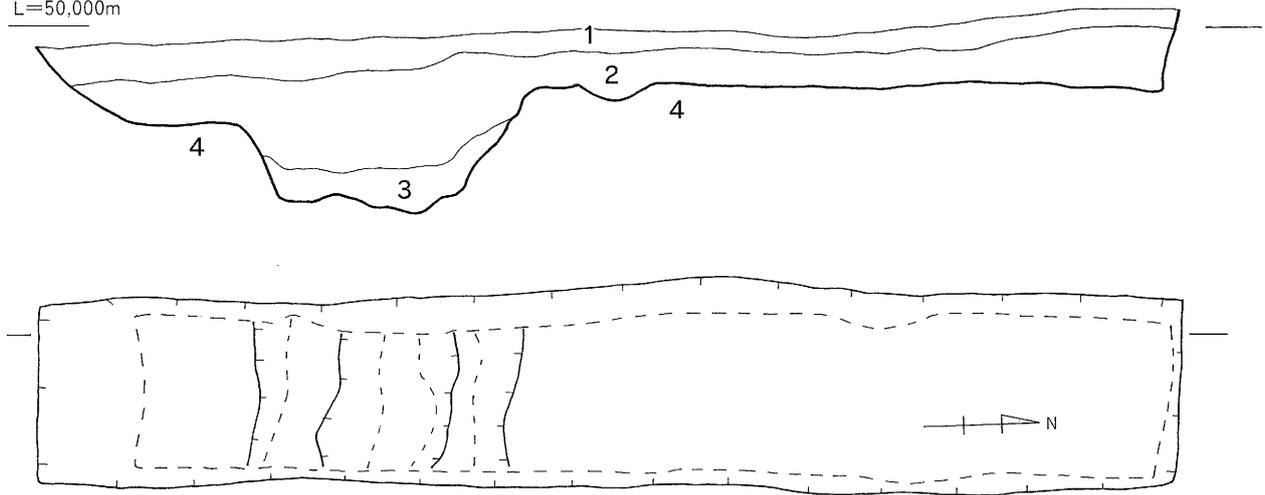
### (3)検出遺構

トレンチ2、3から幅0.7m~1.4m、深さ45cm~65cmの周溝を検出した。古墳北に設定したトレンチ1からは周溝の確認は出来なかった。この部分は以前、土の採取が行われ攪乱を受けていた。今回の調査から、22号墳の規模は復元で直径約14.5mと推測される。

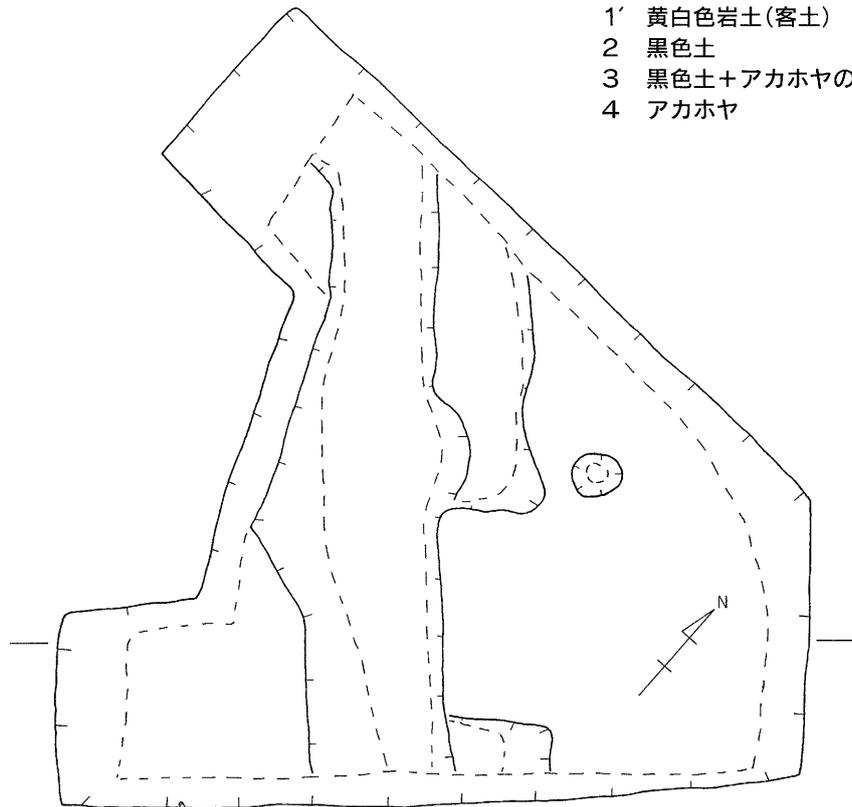
### (4)出土遺物

周溝内より27点の須恵器の破片が出土した。完形ではないがおおよそ6個体分を復元することができた。1は無頸壺の口縁部と肩部の一部である。肩部に一条の沈線が巡る。内外面丁寧なナデ調整である。2は坏蓋で1/2が残る。内面唇部に一条の沈線が巡る。外面ヘラケズリとナデ、内面はナデと不定方向のナデ調整。3~5は坏身である。3は1/4が残る。受部に沈線が巡る。外面ヘラケズリとナデ、内面はナデと不定方向のナデ調整。4は口縁部と受部の一部が残る。内外面ナデ調整である。5も口縁部と受部の一部が残る。外面はやや風化している。内外面ナデ調整。

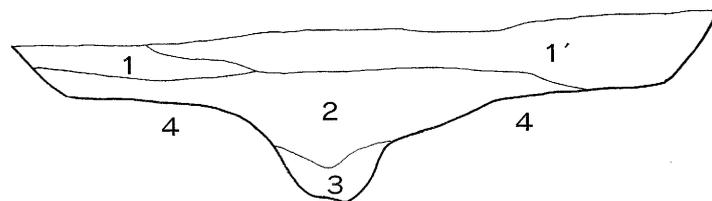
L=50,000m



- 1 表土
- 1' 黄白色岩土(客土)
- 2 黒色土
- 3 黒色土+アカホヤのブロック
- 4 アカホヤ



L=50,200m



0 1m

Fig.18 赤木遺跡(第9次)T2・3検出周溝実測図(1/40)

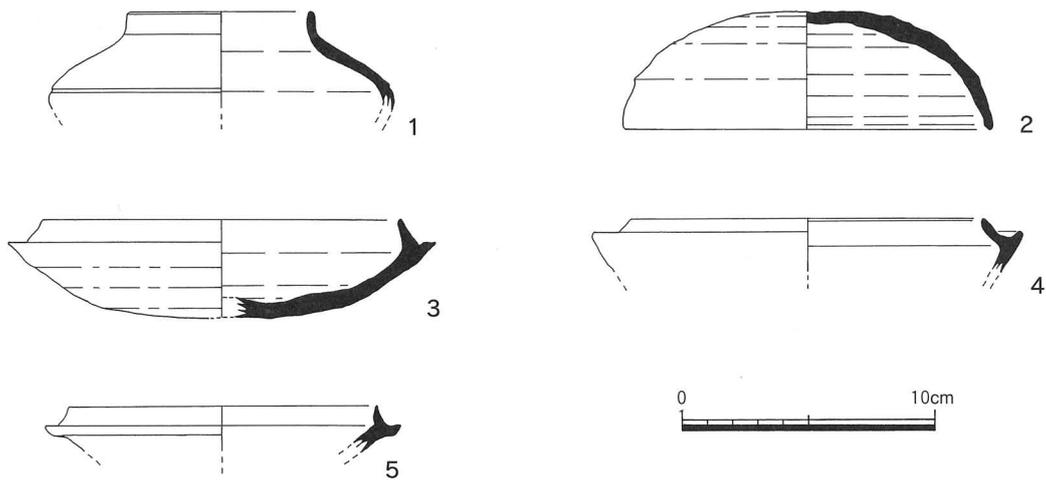


Fig.19 赤木遺跡(第9次)出土遺物実測図 (1/3)

(5)まとめ

今回の調査及び2次調査から、21号、22号墳の規模が判明するとともに、古墳周辺は大規模な土取りが行われ土地の改変が行われていることが判明した。土地の改変が行われたにもかかわらず、21号、22号墳に伴う周溝が残存していたことは幸いであり、今後は指定地番の拡大に努めていかねばならない。



PL.9 赤木遺跡(第9次)出土遺物



# 野地古墳

急傾斜地崩壊対策事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

2004.3／延岡市教育委員会

# 第1章 はじめに

## 第1節 調査に至る経緯

延岡市野地町の丘陵は、平成12年度～平成15年度にかけて宮崎県と延岡市により急傾斜地崩壊対策事業が計画・実施されていた。この丘陵は国史跡南方古墳群野地支群が点在しており、周知の埋蔵文化財包蔵地として取り扱われていた。事業は主管によって調査主体が変わり、県の事業であれば県文化課が、市の事業であれば市文化課が埋蔵文化財の調査を実施していた。今回は市土木課主管であるため、市教育委員会が事前の確認調査を実施した。確認調査は平成15年10月7日～11月8日にかけて実施した。その結果、工事予定地内から墳丘は消滅していたものの二ヶ所の主体部及び周溝を伴う円墳1基が確認された。この結果を基に市土木課と計画変更等の協議を行った。その結果、予定地は民家に隣接しており人命にかかわるとのことから計画の変更は不可能との見解に達し、確認調査で検出した円墳の本調査を行い記録保存措置をとることとなった。

発掘調査は円墳1基の約55m<sup>2</sup>を対象とし、平成15年11月26日～平成16年1月10日の期間で実施した。

## 第2節 調査の組織

野地古墳の調査組織は次の通りである。

調査主体 延岡市教育委員会

	教 育 長	牧 野 哲 久
	教 育 部 長	杉 本 隆 晴
	文 化 課 長	渡 邊 博 吏
	文化課長補佐兼文化振興係長	黒 木 育 朗
	文化財係長	原 岡 秀 樹
庶務担当	主 査	野 下 美智江
調査担当	主任主事	高 浦 哲
調査指導・協力	宮崎大学教育文化学部教授	柳 沢 一 男
	宮崎県教育庁文化課	松 林 豊 樹
	宮崎県埋蔵文化財センター	玉 利 勇 二
	宮崎県埋蔵文化財センター	久 保 春 夫
	宮崎県埋蔵文化財センター	赤 崎 広 志
	宮崎県埋蔵文化財センター	橋 本 英 俊
	宮崎県埋蔵文化財センター	丹 俊 詞
	宮崎県埋蔵文化財センター	柳 田 裕 三
	北方町教育委員会	小 野 信 彦

調査作業員 安藤 登美子、甲斐 カツキ、甲斐 如高、稼農 末治、久保 利男、  
酒井 清子、林田 裕子、松崎 辰磨

整理作業員 敷石 サヨ子、野脇 信子、藤本 千鳥、山本 敬子

## 第2章 遺跡の位置と環境

### 第1節 地理的環境

野地古墳の所在する延岡市は、東経131° 40′ 03″、北緯32° 34′ 43″で宮崎県の北部に位置し、北は北川町・北浦町、西は北方町、南は門川町の4町と境を接し、東は日向灘に面している。東西27.6km、南北26.4km、面積283.82km<sup>2</sup>の市域を占めている。北は600m～700m級の鏡山・可愛岳等の山々が、西は800m～1,200m級の行膝山・桧山・榎峠等の山々が、南は300～360m級の遠見山・烏帽子岳等の山々が連なっている。市東部は海岸線で、北に日豊海岸国定公園に指定されているリアス式海岸が広がり、中部には、県指定天然記念物のアカウミガメが産卵のため上陸する長い砂浜が広がっている。南部は、日向灘に向かって小半島が突き出し、リアス式海岸を形成している。平野部は市域面積の約30%で、市の北と西から流れ込む北川・祝子川・五ヶ瀬川・沖田川の下流域に広がっている。

遺跡の所在する野地町は、市の中央を流れる五ヶ瀬川と、そこから分岐した大瀬川に挟まれた川中地域で、市街地に近く、また交通の便等も良いことからベットタウンとして宅地化が進んでいる地区にあたる。今回はその野地町の標高約20mの丘陵にあたり、眼下には宮崎県立延岡西高等学校を望むことができる。この丘陵上には、前方後円墳1基、円墳3基から構成される国史跡南方古墳群野地支群や未指定の円墳1基が点在している。野地古墳は東から西に延びるこの丘陵の南端にあたり、第41号墳と未指定墳に挟まれた緩やかな斜面地に位置している。調査前は隣接して建てられた宅地により丘陵の一部が削平され、崩壊が危惧される非常に危険な、また竹林の林立する場所となっていた。



Fig.20 野地古墳位置図 (1/50,000)

## 第2節 周辺遺跡と歴史的環境

### 国指定史跡南方古墳群

野地古墳の所在する五ヶ瀬川と大瀬川に挟まれた野地町や周辺地区の野田・大貫町、西を流れる五ヶ瀬川を隔てた天下・吉野・舞野町の一带には国指定史跡南方古墳群39基（現存38基）が分布している。この古墳群は広範囲に分布していることから地区により、野地・野田支群、大貫支群、天下支群、吉野・今井野支群、舞野支群として称されている。また、野地・野田支群には未指定ではあるが、円墳2基が所在し、この支群の一つとして捉えられている。南方古墳群の一部は鳥居龍蔵氏により調査が実施され、古くは大正2年に遡ることができる。また昭和53年には石川恒太郎氏に、平成14年度には、急傾斜崩壊対策による未指定墳の確認調査が県文化課により実施されている。

#### ①天下支群

野地古墳の西方、五ヶ瀬川を隔てた約1.6kmの丘陵及び北西の水田に分布する古墳群で、第1、5、10号墳（前方後円墳）3基、第2～4、6～9号墳（円墳）7基、横穴1基から構成される。大正2年に7、8、10号墳、大正14年に3、4号墳、昭和4年に40号墳の調査が鳥居龍蔵氏により行われている。7号墳からは、阿蘇溶結凝灰岩製（以下凝灰岩）の組合式石棺が検出され、直刀・鉄剣・刀子・矛・勾玉・管玉・ガラス製小玉が出土している。隣接する8号墳からは、7号と同構造の石棺内から直刀・鉄剣・鉄鏃が、棺外から直刀・鏡（変形乳文鏡）が出土している。10号墳は天下支群の首長墓の一つで、粘土槨（木棺）内から直刀・鉄剣・刀子・勾玉・管玉・竹櫛が出土している。3号墳からは凝灰岩製の組合式石棺が検出され鉄鏃片・土器片が、隣接する4号墳からは、3号同構造の石棺内から鉄剣・鉄斧・鋏・刀子・鉄鏃が出土している。40号墳（横穴）は2基存在し、1基はすでに盗掘を受けていたが、残りの1基からは直刀・刀子・鉄鏃・金環・ガラス製小玉・紡錘車・須恵器・土師器が出土している。

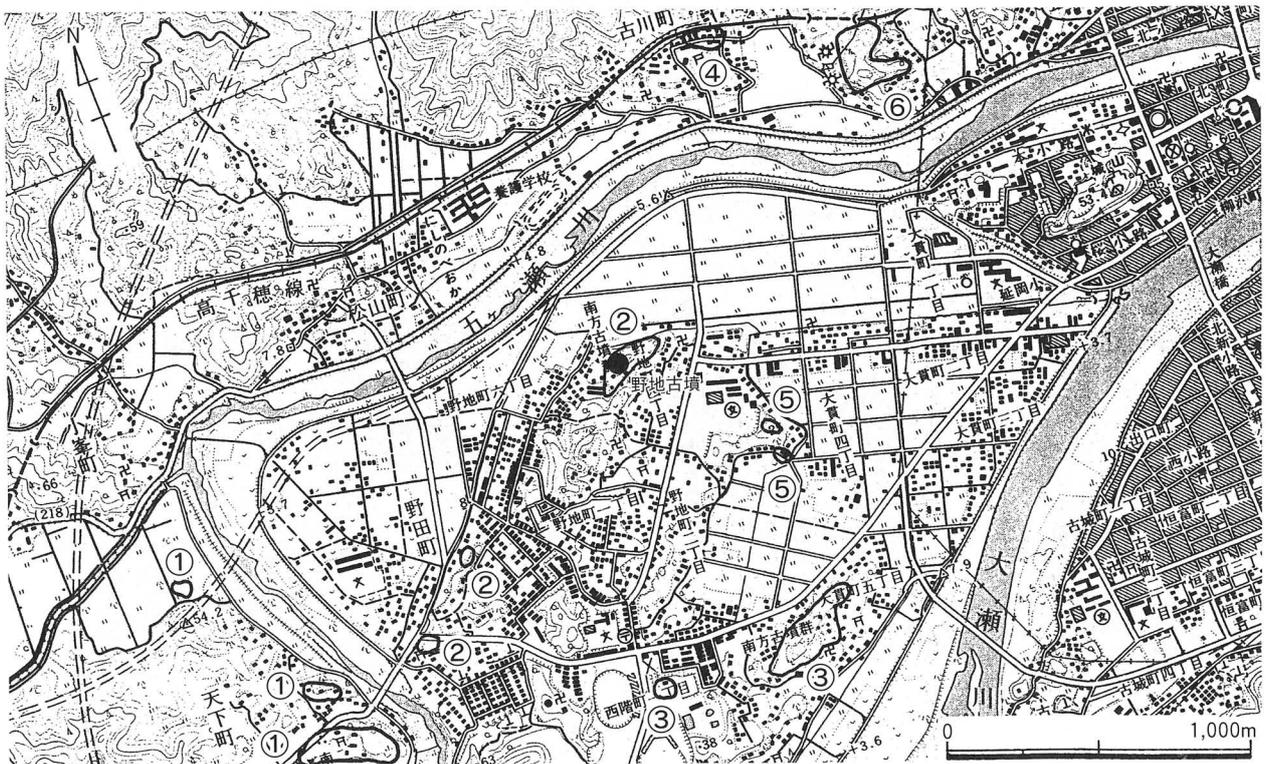


Fig.21 野地古墳周辺遺跡分布図（1/25,000）

本支群は第1、5、10号墳を首長とする古墳群である。5号墳は詳細不明な点が多く資料的に欠けるが、10号墳が5世紀前半～中頃に造営され、その後1号墳と続き、一時空白期を迎え6世紀中～後半にかけて古墳が造営されたと推定される。

## ②野地・野田支群

野地古墳の立地する丘陵で、第34号墳（前方後円墳）、第35号墳（円墳）、第36号墳（円墳）、第41号墳（円墳）、未指定墳（円墳）の5基が分布している。また同地区内に第33号墳（円墳）が所在している。近隣の野田町には第37号墳（円墳）、第38号墳（円墳）、未指定墳（円墳〈地蔵ヶ森古墳〉）が分布している。野地・野田支群の調査は、昭和4年に鳥居龍蔵氏により地蔵ヶ森古墳調査が実施されている。調査から粘土棺（粘土槨）2基が検出されたが、遺物は盗掘を受け存在していなかった。平成14年度は本古墳と同丘陵にある未指定墳県文化課により調査されているが、古墳として裏付ける結果は得られていない。

本支群は第34号墳を首長とする古墳群であるが調査例が不足しており、他地区の古墳群との前後関係及び勢力関係など詳細は不明である。

## ③大貫支群

野地古墳の南方約1.1kmの丘陵に分布する古墳群で第39号墳（前方後円墳）1基、第24～32号墳（円墳）9基から構成される。大正2年に横穴式石室を持つ24号墳、昭和4年に32、39号墳の調査が鳥居龍蔵氏により行われている。また24号墳は昭和53年に石室崩壊による修復が行われ調査が実施されている。24号墳の調査では、鉄鏃・丸玉・須恵器片が出土している。32号墳からは木棺を主体部とする内部から刀子・鉄製鐸・虎頭鈴・鉄釘・鉄製円板が出土している。39号墳は大貫支群の首長墓で、大量かつバラエティに富んだ副葬品が出土している。主体部は粘土槨（木棺）で、木棺の中央に鉄剣が置

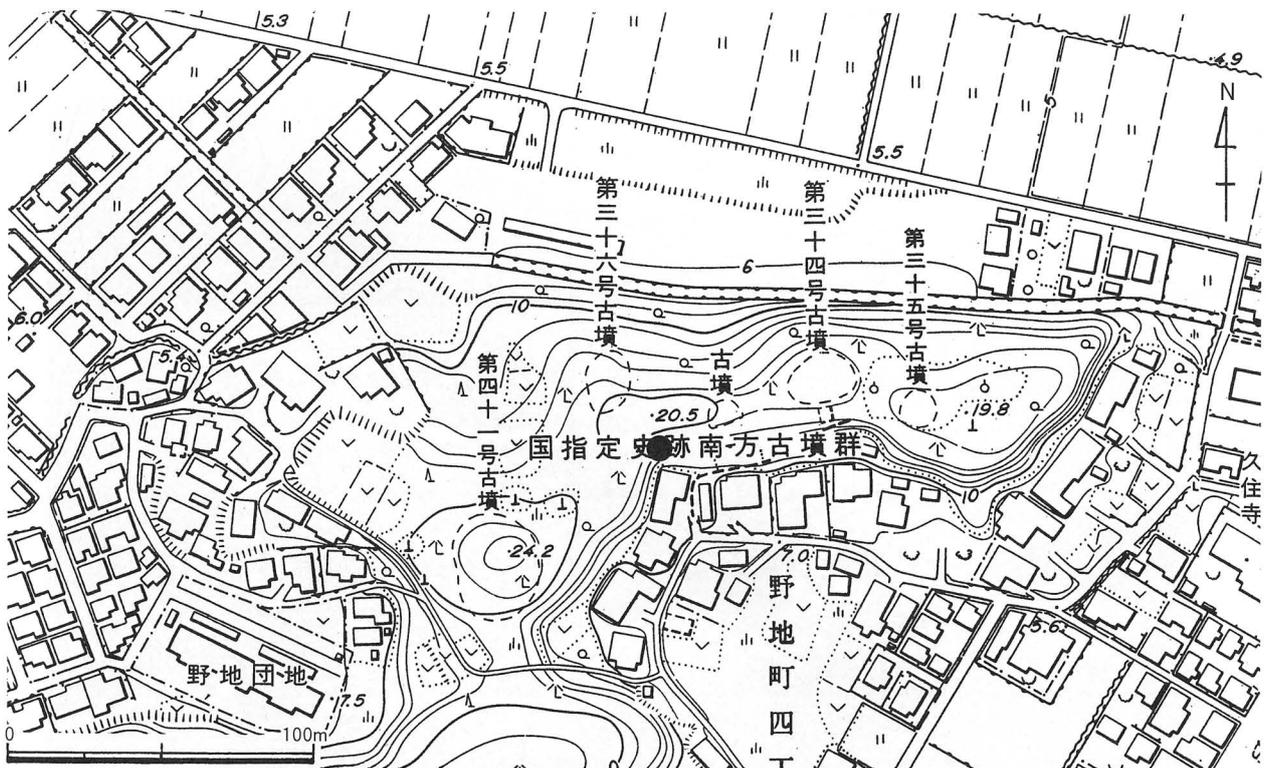


Fig.22 野地古墳周辺古墳分布図 (1/2,500)

かれており二体埋葬が示唆されている。棺東では歯の断片・鉄剣・竹櫛が、棺西からは短甲・兜・矛・盾の把手・直刀・鉄剣・蛇行剣・鉄斧・竹櫛が出土している。

本支群は第39号墳を首長とする古墳群であり、39号墳は主体部及び出土遺物から5世紀前半に造営された推定される。その後は首長墓が見られないことから終焉を迎え、24号墳の存在から再び古墳群として展開したものと推定される。

#### ④古川古墳

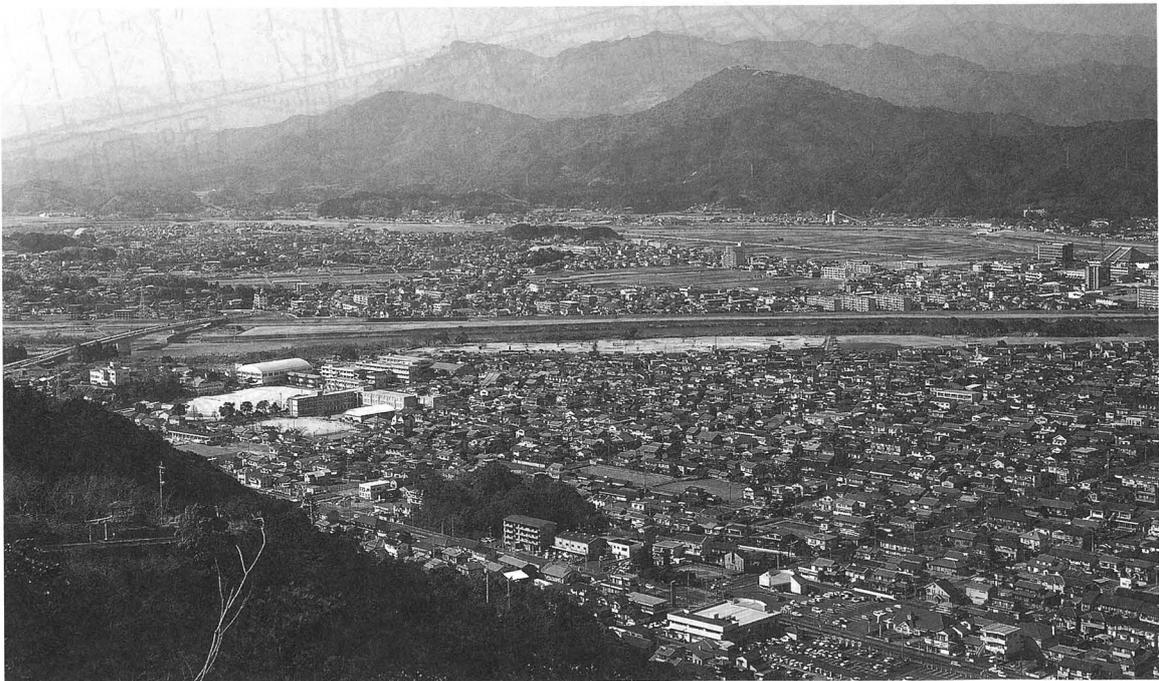
野地古墳の北方約1.1kmの丘陵に所在した古墳。宅地造成による丘陵削平中に石棺が発見された。すでに主体部は破壊されていたが、石棺・遺物の一部は地主宅に保管されていた。石棺は凝灰岩製の刳抜き石棺で、内部全面には朱が塗られていた。遺物は短甲残欠・直刀・刀柄部・剣・鉄鏃が取り上げられた。古川古墳は地形から円墳であったと判断され、遺物の状況から古墳時代中期に造営されたと推察される。

#### ⑤野地の石人・ガンガン石

野地古墳の南方に約500mの、同区内にある丘陵中腹に古墳時代のものとみられる石人が所在する。詳細な調査は実施されていない。また、丘陵裾部には通称「ガンガン石」と呼ばれる巨石が露出している。この巨石は横穴式石室の一部とみられるが、詳細な調査は実施されていない。

#### ⑥上多々良箱式石棺群

野地古墳の北東方約1.3kmの丘陵に所在する。この丘陵には2基の箱式石棺が露出している。平成10年度、当丘陵を含む岡富・古川町に大規模な区画整理事業が計画され、事前の確認調査を年次的に実施している。10年度の調査では、箱式石棺3基が確認され、また土器が集中して出土する地点、鉄製品の出土する地点などを確認している。



PL.10 野地古墳遠景（愛宕山より）

### 第3章 調査の概要

#### 第1節 調査の経過

調査地一帯は竹林が林立しており、確認調査時のトレンチ部及び主体部Aの周囲、それに直行するトレンチ部のみ伐採している状況にあった。調査地の丘陵は周囲一帯を民家に囲まれた独立丘陵であったため重機による掘り下げは不可能であった。そこで、まず人力による竹伐採、竹根の伐根作業を実施し調査範囲の確保を行った。人力また非常に大量に竹が残っていたことから時間のかかる作業となってしまった。また、天候不順により調査可能日が限られたため、予定していた日程のオーバーが予想された。そこで事業担当課である市土木課に調査期間延長を打診し、当初12月末までを予定していた調査期間を1月初旬まで延長して頂いた。事業担当課である土木課また施工業者、地域の住民の方々の多大な理解と協力により、平成16年1月10日にすべての調査を終了することができた。



Fig.23 野地古墳調査区配置図 (1/200)

## 第2節 調査の方法

野地古墳は確認調査の結果から、墳丘及び周溝の一部を消失しているものの、主体部2ヶ所（主体部A・B）、及び周溝を伴う円墳であることが確認されている。確認調査では主体部Aのプラン検出及び周溝の推定範囲の調査を実施し、およそその古墳の規模を図ることができた。今回確認した円墳は、工事範囲の最西端部に位置するため、周溝の一部の調査は不可能な状態にあった。また、南は民家建設の際、丘陵の一部が削平されたため比高差約10mの崖状を呈し非常に危険な状況にあった。調査は土砂置き場確保と法面崩壊による転落防止対策をしながら可能な限り工事範囲の調査を行った。

本調査は確認調査の成果を生かし、調査範囲内に1m×1mのグリッドを設定し、一部主要な土層観察ベルトを残しながら人力による掘り下げを実施していった。調査は竹根による攪乱が土層下部まで及んでいたため検出面がかなり下がる結果となった。

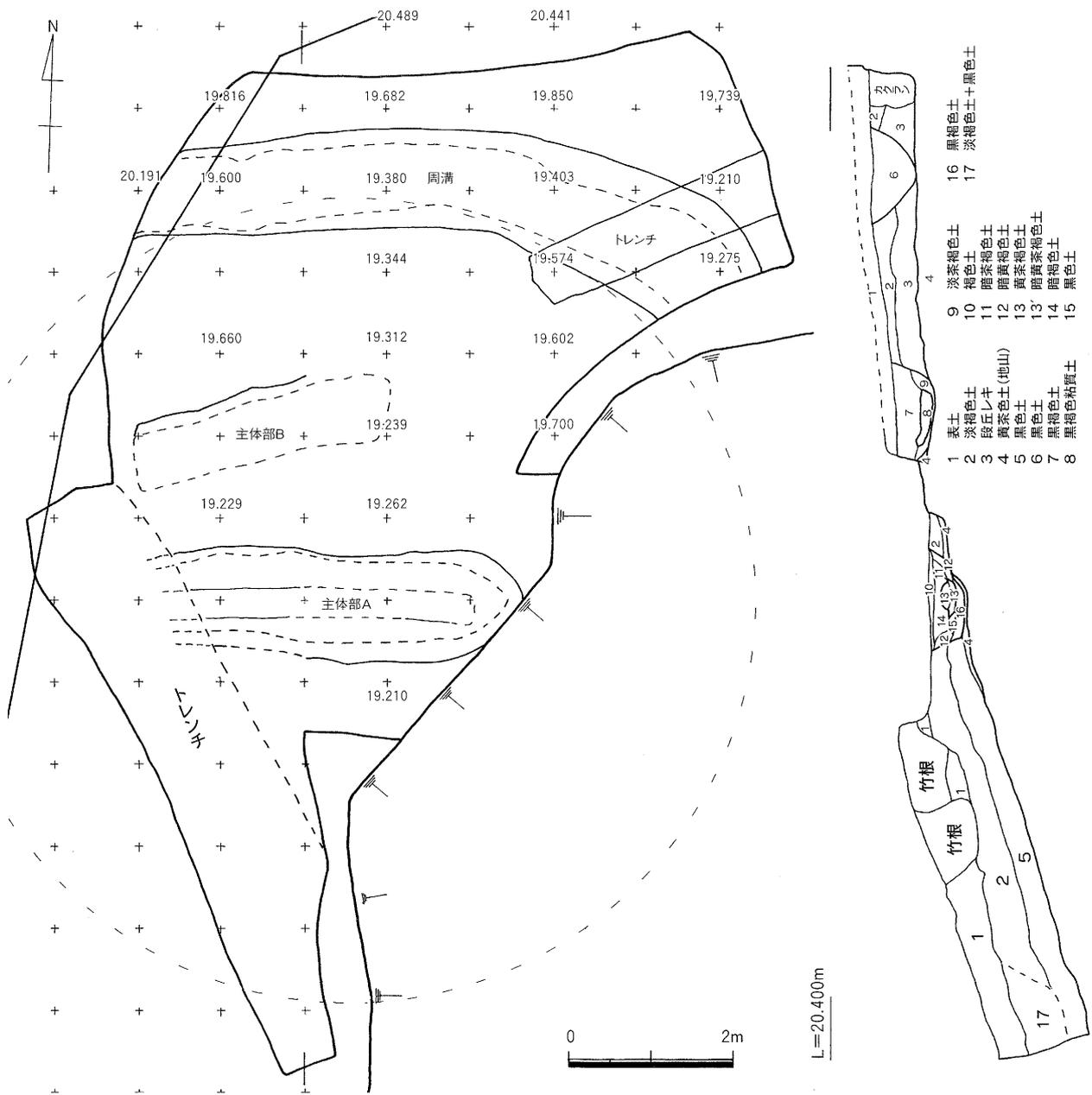


Fig.24 野地古墳検出遺構分布図 (1/80)

## 第4章 調査の記録

### 第1節 古墳の立地

工事予定地の最西端に位置する北から南へ緩やかに下る斜面地で検出した。主体部Aは確認は土層で標高約19.4mであったが検出面は、土層では標高約19.2mを測る。主体部Bの検出面は標高約19.65mを測る。周溝の検出面は最高位で標高約19.9m、最低位で標高約19.5mを測る。

### 第2節 古墳の規模と構造

本墳は、墳丘、周溝の一部を消失した円墳である。また、調査範囲が限られたため、古墳の規模は推定復元及び、調査により確認された数値を記載する。

全長は復元で直径約12m、墳径約9.8mを測る。墳丘周囲には幅1.0m～1.5m、深さ30cm～50cmの周溝が全周していたとみられる。

盛土は消失していたが、主体部2ヶ所を伴っており、構造は遺物の出土状況、土層堆積状況からいずれも木棺直葬であったと判断される。

### 第3節 古墳の主体部

主体部は宅地造成・確認調査時のトレンチによる破壊を受けたため、数値は調査で確認した値を記載する。

#### (1)主体部A

民家建設時の丘陵削平、確認調査時のトレンチにより一部破壊を受けた。主軸方向は東西で本墳のほぼ中心に位置する。墓壙は長さ約4.5m、幅1.3m、深さ45cmを測り、内部に木棺を埋葬したみられる。墓壙の東端には人頭大程の礫が配されていた。

木棺は長さ約3.6m、幅47cmを測り、棺中央底部及び西端に安定を図るため、拳大から人頭大程の礫が一部分配されていた。墓壙内の埋土には、拳大ほどの礫を大量に含んでおり、これは当丘陵を構成する段丘礫を古墳築造の際掘り下げた影響によるものと判断された。

#### (2)主体部B

主体部Aの約2.0m南で検出した。確認調査時のトレンチ及び主体部Aのプラン検出の調査により

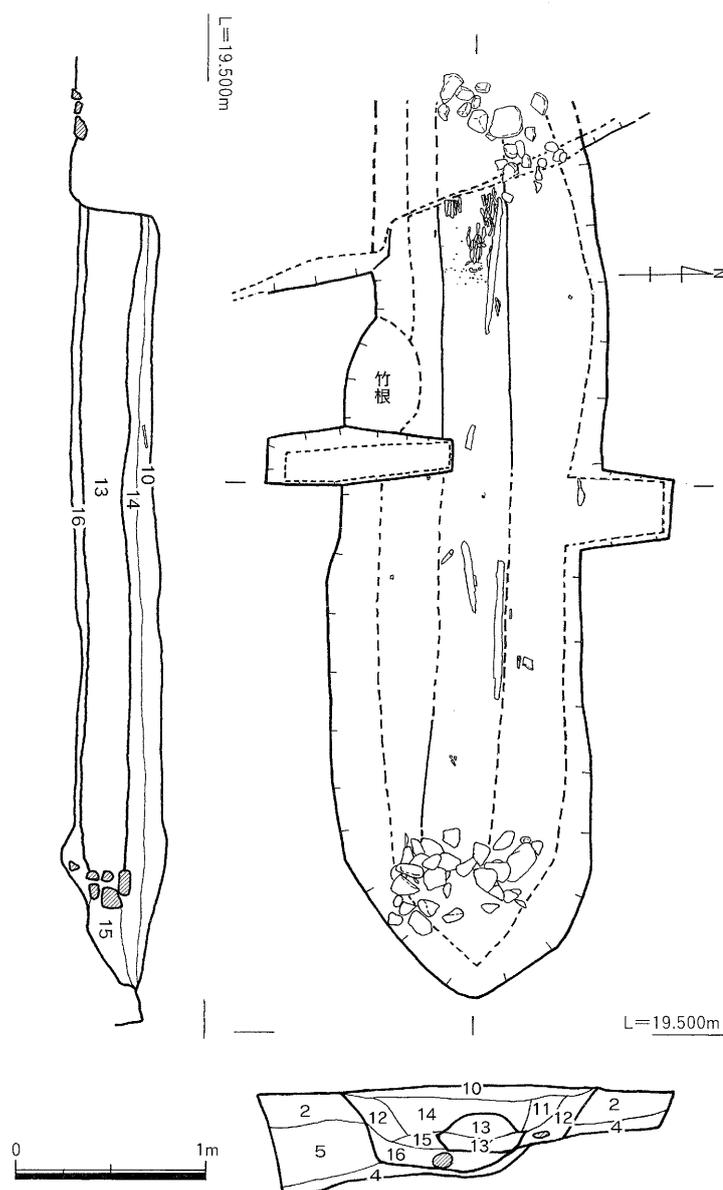


Fig.25 野地古墳主体部A実測図 (1/40)

一部破壊を受けた。

主軸方向はやや南に振り、また古墳中心から南西に外れる。墓壙は長さ3.25m、幅1.2m、深さ33cmを測り、内部に木棺を埋葬したみられる。墓壙の東端には拳大程の礫が敷き詰められていた。

木棺は長さは不明で、幅70cmを測る。東端部は礫が敷き詰められていた。主体部Bは竹根による攪乱が著しく、検出した数値に些か不安が残る。

#### 第4節 出土遺物の状況

遺物は調査により取り上げた数を記載した。調査後の整理が未完なため、種類、数量に変動が生じると予想される。

##### (1)主体部A

遺物は墓壙内埋土より直刀の破片1、刀子2、鉄鏃1、馬具の一部とみられる鉄製品1、不明鉄器1、須恵器片1、土師器片少量を取り上げた。直刀は墓壙中央、刀子は中央北端及び西北端、鉄鏃は西南端、馬具の一部と須恵器片は中央北端でそれぞれ出土した。土師質土器は微細片である。これらの遺物は、出土状況から棺外副葬品と判断される。

棺内からは中央部付近～東部及び西端から出土した。特に西端では集中して出土した。中央部付近からは鉄剣1、短剣1、鉄鏃1が、東部では不明鉄器1、ガラス製小玉1を取り上げた。

西端部からは鉄剣1、鉄鏃28、馬具の一部とみられる鉄製品1、錐1、勾玉1、ガラス製小玉32を取り上げた。鉄鏃は三ヶ所に集中しており、錐は鉄鏃群に含められていた。馬具の一部は鉄剣の北側で出土した。勾玉とガラス製小玉はほぼ同レベルで出土したが、小玉が一部散在することからこれらを一個体として見るには疑問が残る。

##### (2)主体部B

遺物はすべて棺内から出土したもので、東端～中央にかけて遺物が集中している。東端からは鉄斧1、ヤリガンナ1、鉄鏃1を取り上げた。東から中央にかけては、短剣1、鉄剣1、管玉2を取り上げた。中央付近の南北両側からは鉄鏃33を取り上げた。

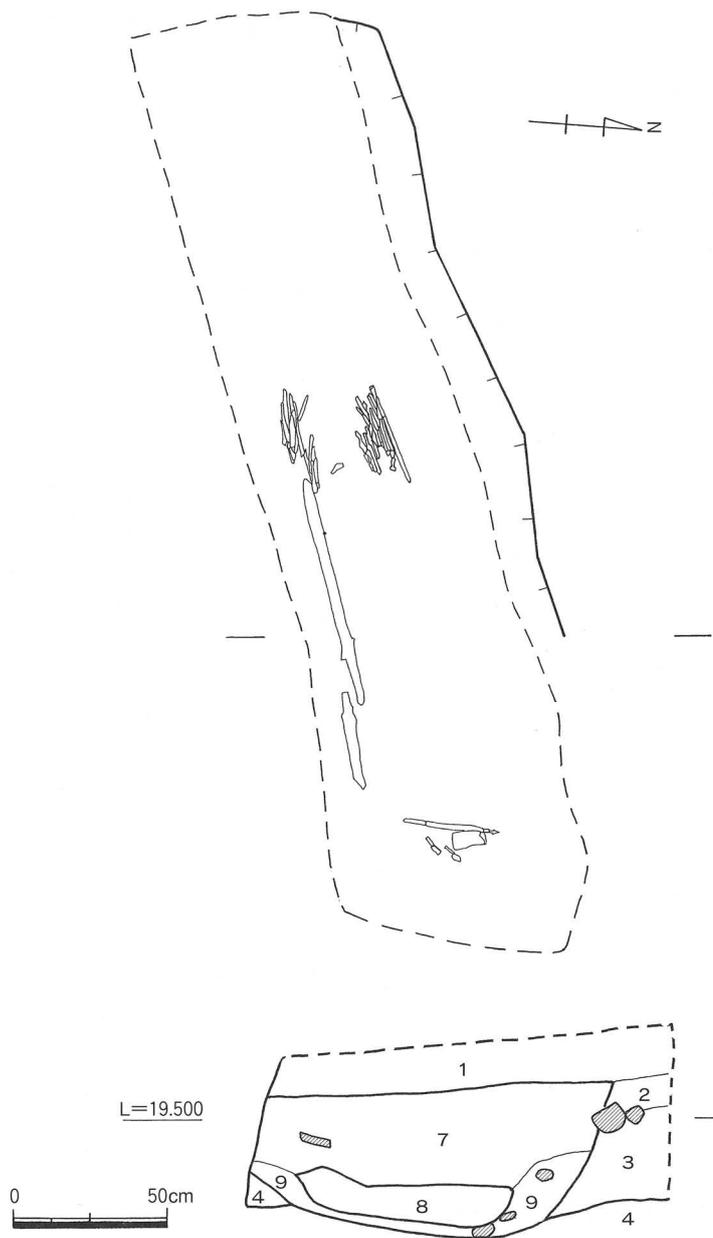


Fig.26 野地古墳主体部B実測図 (1/25)

## 第5節 出土遺物

### (1)主体部A

#### 棺外出土遺物

1は刀片で、切先と柄部が欠損している。現存部で長さ11.1cm、幅3.3cm、鎬厚0.3cmを測る。2は墓壙の中央北端で出土した刀子である。長さ12.5cm、幅1.9cm、鎬厚0.4cmを測り柄に木質が残る。西端で出土した刀子は、確認調査報告（同本木ノ下遺跡）にて記載した。3は馬具の一部とみられる。轡の一部と予想されるが部位に関しては不明である。4は須恵器の破片である。壺と思われ内面にタタキ痕が残る。

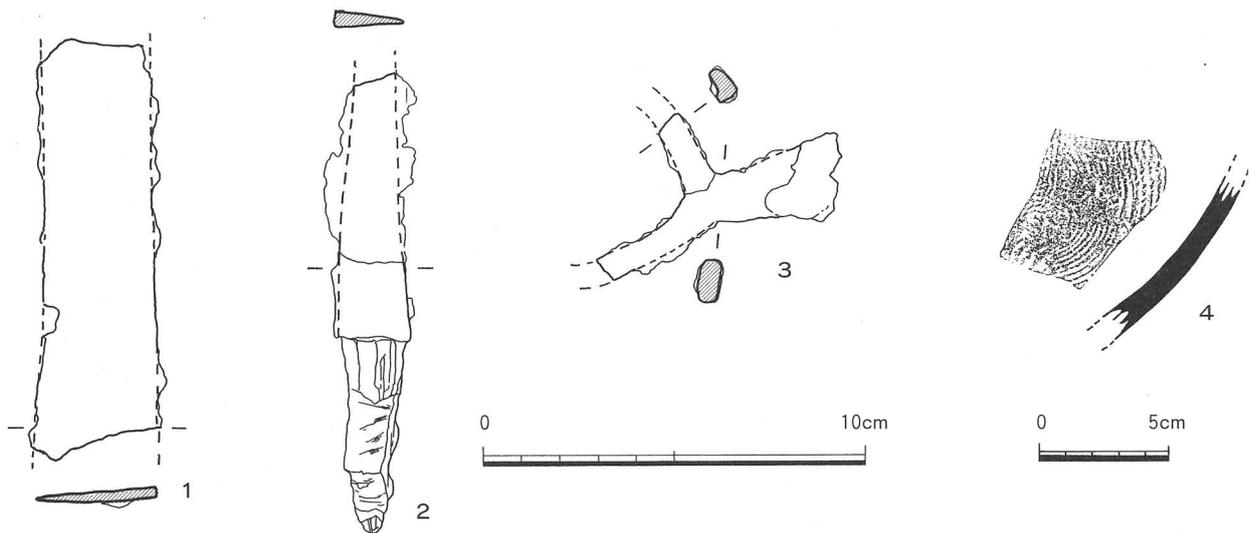


Fig.27 野地古墳主体部A出土遺物実測図1 (1～3=1/2、4=1/3)

#### 棺内出土遺物

5は棺中央部で出土した鉄剣である。全体に木質が遺存しており、柄部には紐状の植物繊維が巻き付けられている。また柄部には目釘穴が2ヶ所確認できる。長さ74.0cm、刃部幅3.9cm、刃部厚0.5cmを測る。6は棺西端で出土した鉄剣である。一部瘤錆が著しいが全体に木質が遺存している。長さ72.0cm、刃部幅3.3cm、刃部厚0.6cmを測る。7は短剣である。切先部は瘤錆が著しいが残存状態は良好である。全体に木質が遺存している。長さ37.8cm、刃部幅3.3cm、刃部厚0.8cmを測る。8は刀子である。刃部に布痕、柄部に木質が遺存している。長さ9.6cm、刃部幅1.8cm、鎬厚0.2cmを測る。9～16は鉄鏃である。主体部A出土の鉄鏃は柳葉鏃群と長頸鏃群の二種類に分類できる。9～10は柳葉鏃である。9は2点が錆着している。いずれも錆が著しく1点は茎部が欠損している。9は長さ12.8cm、復元幅1.3cm、刃部厚は不明である。もう1点は現存長11.5cm、復元幅1.3cm、刃部厚は0.2cmである。10は刃部と頸部に瘤錆が著しい。長さ12.4cm、刃部幅1.4cm、刃部厚は0.25cmである。11～13は長頸鏃で鏃身が長三角形を呈する部類である。11は鏃身部付近に布目痕が残る。茎部が欠損している。現存長12.4cm、刃部幅1.0cm、刃部厚は0.3cmを測る。12も茎部が欠損しており瘤錆も著しい。現存長13.5cm、刃部幅0.9cm、刃部厚0.25cmを測る。13は茎部が欠損しており錆も著しい。刃部の一部は剥離している。現存長12.6cm、刃部幅0.7cm、刃部厚は0.2cmを測る。14～16は長頸鏃で鏃身が三角形を呈する部類である。14は完形であるが瘤錆が著しい。茎部に木質が遺存する。長さ16.5

cm、刃部幅0.85cm、刃部幅0.2cmを測る。15も完形であるが刃部が錆により二つに剥離している。茎部には樹皮巻きが認められる。長さ16.7cm、刃部幅0.6cm、頸部厚0.45cmを測る。16は茎部が欠損している。錆も著しく刃部がやや膨れている。現存長12.8cm、刃部幅0.9cm、頸部厚0.4cmを測る。17は馬具の一部とみられる。部位に関しては不明である。18は錐である。完形で断面形は四角形を呈する。1/2に木質が遺存する。長さ8.0cm、幅0.3cm、厚さ0.2cmを測る。19は蛇文岩製の勾玉で綠色を呈す。全体的に良く磨かれている。頭部の穿孔は一方向から行われている。20~24はガラス製の小玉である。大きさは径0.1mm~0.8mmと様々である。色調はすべて青色系である。

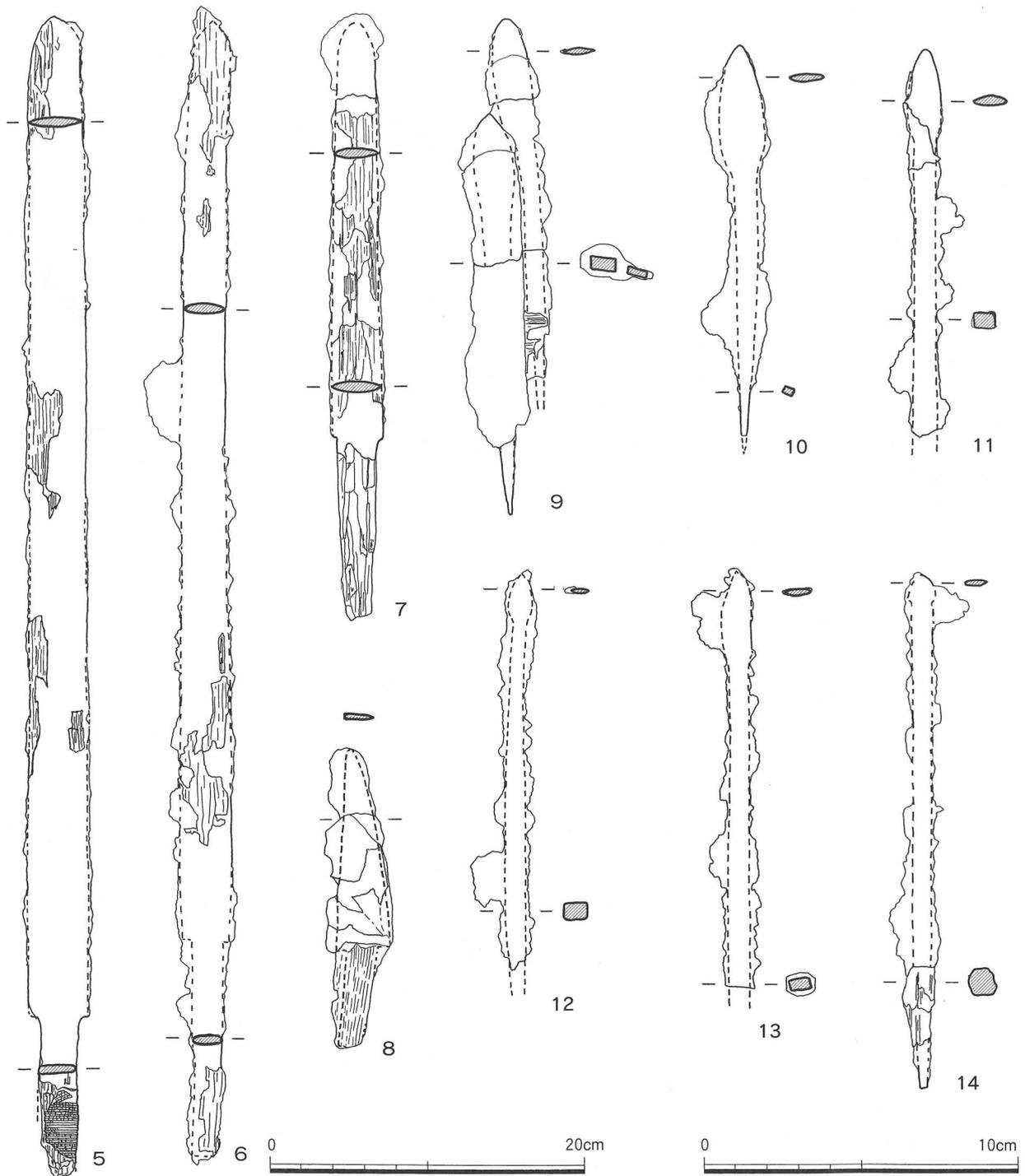


Fig.28 野地古墳主体部A出土遺物実測図2 (5~7=1/4 8~14=1/2)

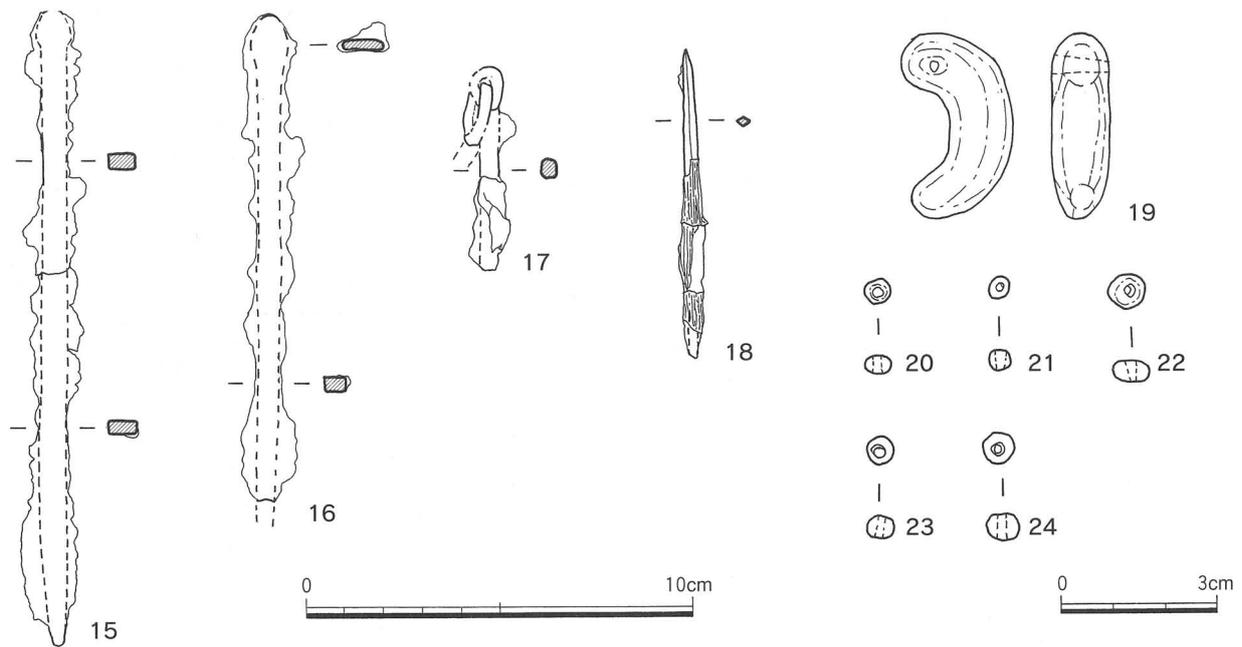


Fig.29 野地古墳主体部A出土遺物実測図3 (15~18=1/2 19~24=2/3)

## (2)主体部B

25~32は鉄鏃である。主体部Bの鉄鏃は圭頭鏃と長頸鏃群の二種類に分類できる。25は東端の鉄斧の横から出土した。錆により鏃身部が剥離しているが圭頭鏃とみられる。現存長6.2cm、刃部幅2.0cm、刃部厚は0.2cmだが0.3~0.4cm程とみられる。26~27は長頸鏃で鏃身部が長三角形を呈し、なお鏃身関部に逆刺を有する部類である。26は頸部~茎部が欠損している。現存長11.3cm、刃部幅1.05cm、刃部厚は0.2cmを測る。27は、ほぼ完形であるが鏃身部が欠損している。刃部に大きな瘤錆があり、刃部厚は不明だが0.2cm程度と推察される。長さ16.1cm、刃部幅1.2cmを測る。28は長頸鏃で鏃身部が三角形を呈する部類である。6つに折れているが完形である。刃部は錆でやや膨らんでいる。長さ19.2cm、刃部幅1.0cm、刃部厚0.2cmを測る。29~32は長頸鏃で鏃身部が片刃を呈し、なお鏃身関部に逆刺しを有する部類である。29は茎部が僅かに欠損している。茎部には樹皮巻きが認められる。刃部には瘤錆が発達している。現存長15.3cm、刃部幅0.9cm、刃部鏃厚0.3cmを測る。30は茎部が欠損している。頸部に瘤錆が発達している。刃部には鉄片が錆着している。現存長12.6cm、刃部幅1.0cm、刃部鏃厚0.5cmを測る。31は折れてはいるが完形である。頸部の一部が瘤錆により膨れている。長さ18.9cm、刃部幅0.8cm、刃部鏃厚0.35cmを測る。32は茎部が欠損している。鏃身部がやや長い。現存長16.9cm、刃部幅0.9cm、刃部鏃厚0.3cmを測る。33~34は確認調査で出土していた遺物である。33は袋状鉄斧である。袋部の断面は楕円形を呈す。錆瘤が見られるが残存状態は良好である。長さ10.6cm、最大幅5.4cm、袋部厚3.3cmを測る。34はヤリガンナで一部木質が残る。現存長29.1cm、幅1.2cm、厚さ0.2cmを測る。刃先は内湾する。35は短剣である。瘤錆が著しく刃先部が欠損している。柄部付近に木質が遺存し、目釘穴1つが確認できる。現存長32.7cm、刃部幅4.2cm、刃部厚0.6cmを測る。36は鉄剣である。一部瘤錆が著しいが全体には木質が遺存し、4つに折れているが残存状態も良好である。柄部に目釘穴2つが確認できる。長さ75.9cm、刃部幅4.0cm、刃部厚0.5cmを測る。37~38は管玉である。いずれも緑色岩製で風化が著しい。色調は緑灰色を呈している。穿孔は両側から行われているとみられる。37は長さ1.25cm、径0.1~0.15cm、38は長さ1.7cm、径0.2~0.4cmを測る。

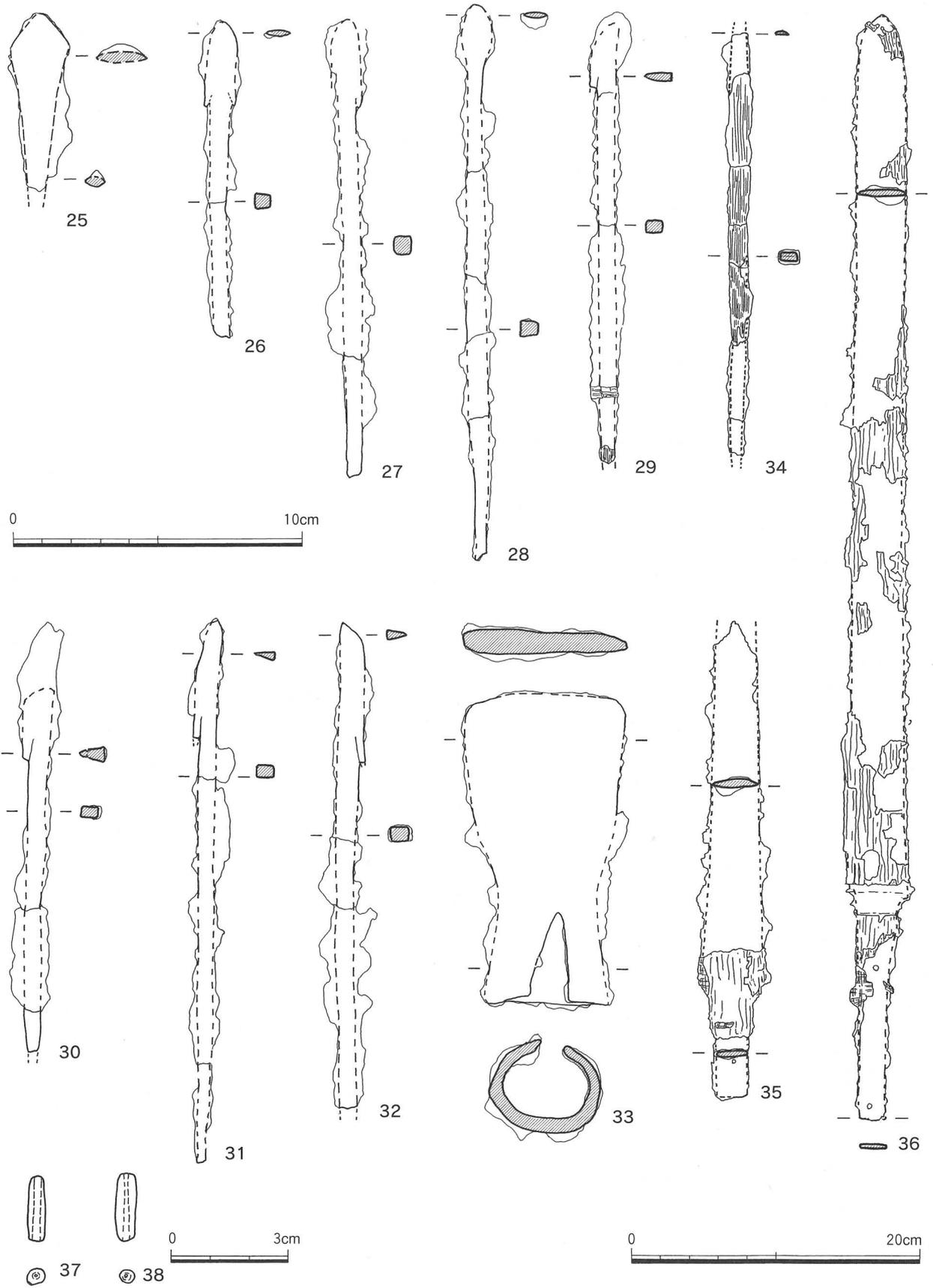


Fig.30 野地古墳主体部B出土遺物実測図 (25~33=1/2 34~36=1/4 37、38=2/3)

(3)周溝

周溝内からは非常に細片化された須恵器片、土師質土器片、土錘片が出土した。遺物の取り上げは、個体として取り上げができなかったためブロックとして取り上げた。取り上げたブロック数は63、点数として157点を数える。種別としては、須恵器片9点、土師質土器片145点、土錘3点である。須恵器片は殆どが坏蓋・坏身、土師質土器片には、高坏や甕の底部がみられる。25~27は須恵器である。25は蓋坏の破片で、外面ヘラケズリ、内面はナデ調整である。風化が著しい。26は坏身の口縁部の破片。受部下に一条の沈線が巡る。内外面ナデ調整である。27は高坏の脚部とみられる。内外面ナデ調整である。28~33は土師質の土器である。28は甕の底部とみられる。内外面ナデ調整である。29も甕の底部とみられる。風化により調整は不明である。30は高坏の坏部である。風化により調整は不明である。31は高坏脚部で若干風化している。外面ヘラミガキ、内面はナデ調整である。32も高坏の脚部である。風化により調整は不明である。33は器台の脚部とみられる。外面に三条の沈線が巡る。内面にはススが付着する。内外面ナデ調整である。

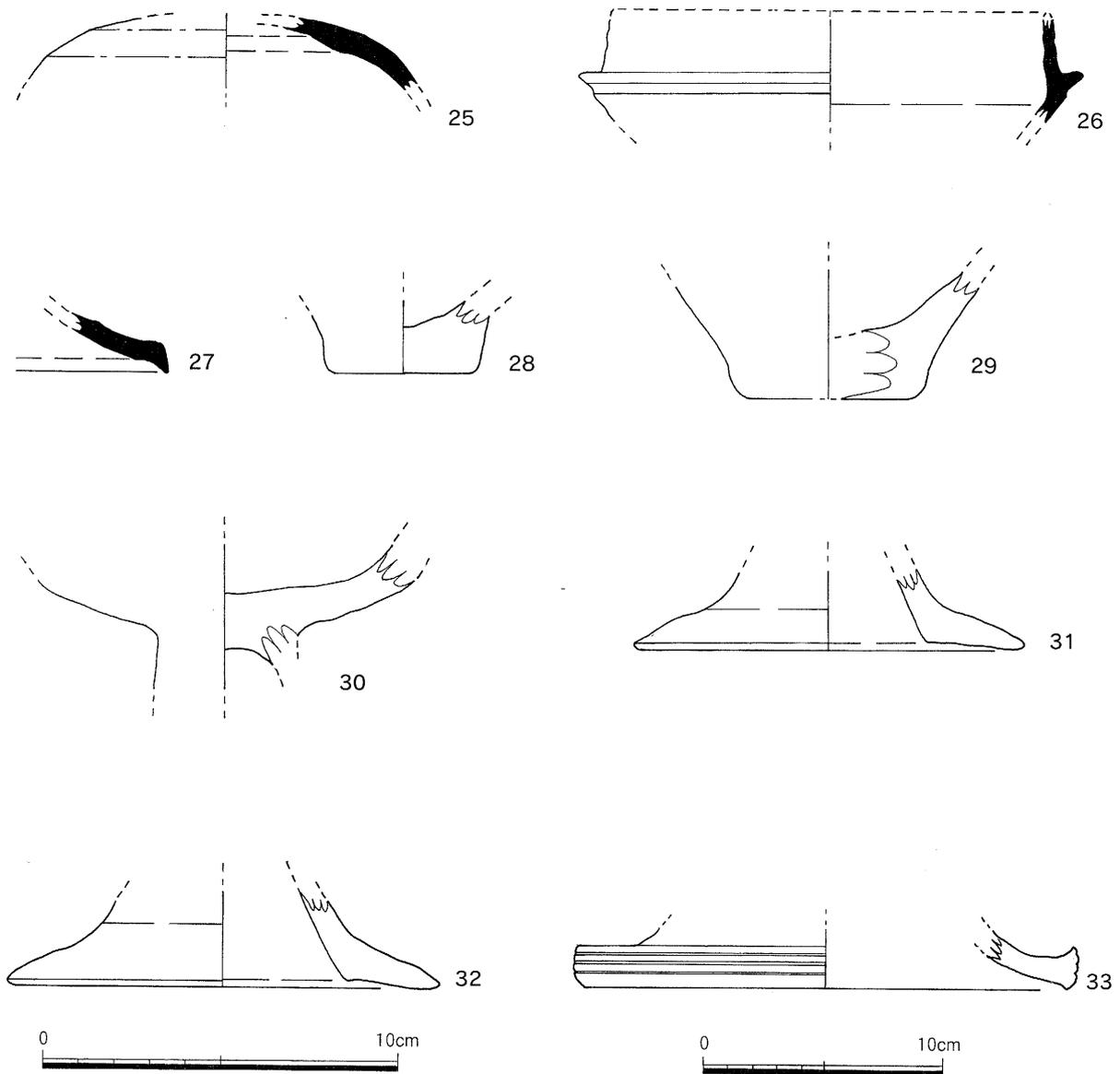


Fig.31 野地古墳周溝内出土遺物実測図 (25~32=1/2 33=1/3)

No.	取上位置	名称	分類	部位	残存長	残存幅	残存厚	備考	図面No.
1	棺外	刀		胴部	11.1	3.3	0.3	稿厚計測	1
2	棺外	刀子		完形	12.5	1.9	0.4	稿厚計測	2
3	棺内	鉄鏃	不明	茎部	2.5	0.4	0.4		
4	棺内	鉄鏃	不明	茎部	3.1	0.6	0.6		
5	棺外	鉄鏃	不明	茎部	2.1	0.3	0.3		
6	棺内	不明鉄製品		不明	3.3	0.6	0.6		
7	棺外	馬具?		轡?	6.3	—	0.6		3
8	棺外	不明鉄製品		不明	4.3	0.6	0.5		
9	棺内	刀子		完形	9.6	1.8	0.2	稿厚計測	8
10	棺内	鉄剣	短剣	完形	37.8	3.3	0.8		7
11	棺内	鉄鏃	長頸鏃	鏃身部～頸部	5.7	1.0	不明	錆著しい	
12	棺内	鉄剣		完形	74.0	3.9	0.5		5
13	棺内	鉄剣		完形	72.0	3.3	0.6		6
14	棺内	馬具?		不明	6.4	—	0.55		17
15	棺内	鉄鏃	柳葉鏃	ほぼ完形	12.4	1.4	0.25	錆著しい	10
16	棺内	錐		完形	8.0	0.3	0.2		18
17	棺内	鉄鏃	長頸鏃	鏃身部・頸部	5.0	1.2	不明	鏃身部のみ計測、錆著しい	
18	棺内	鉄鏃	長頸鏃	頸部～茎部	11.5	0.7	0.4		
19	棺内	鉄鏃	柳葉鏃	鏃身部～頸部	8.9	不明	不明		
20	棺内	鉄鏃	長頸鏃	完形	12.6	1.2	不明	長三角形	
21	棺内	鉄鏃	柳葉鏃	完形	12.8	1.2	0.2	2点錆着、刃部厚計測	9
22	棺内	鉄鏃	長頸鏃	完形	9.5	不明	不明	錆著しい	
23	棺内	鉄鏃	長頸鏃	鏃身部	5.0	0.9	0.3	確認調査報告 頸部厚計測	
24	棺内	鉄鏃	長頸鏃	頸部～茎部	6.8	0.6	0.5		
25	棺内	鉄鏃	長頸鏃	完形	12.5	0.7	不明	錆著しい	
26	棺内	鉄鏃	長頸鏃	頸部～茎部	9.2	0.9	0.4		
27	棺内	鉄鏃	長頸鏃	頸部～茎部	8.0	0.7	0.4		
28	棺内	鉄鏃	長頸鏃	鏃身部・頸部・茎部	2.3	1.1	0.3	鏃身部のみ計測	
29	棺内	鉄鏃	長頸鏃	頸部～茎部	5.1	0.8	0.4		
30	棺内	鉄鏃	長頸鏃	完形	16.5	0.85	0.2		14
31	棺内	鉄鏃	長頸鏃	鏃身部～頸部	5.1	1.1	0.4	錆著しい	
32	棺内	鉄鏃	長頸鏃	頸部	6.0	0.6	0.4		
33	棺内	鉄鏃	長頸鏃	鏃身部～頸部	12.4	1.0	0.3	布目痕あり	11
34	棺内	鉄鏃	長頸鏃	鏃身部～頸部	13.5	0.9	0.25		12
35	棺内	鉄鏃	長頸鏃	完形	16.7	0.6	0.45	頸部厚計測 刃部2つに剥離	15
36	棺内	鉄鏃	長頸鏃	完形	16.1	1.2	不明	錆著しい	
37	棺内	鉄鏃	長頸鏃	鏃身部～頸部	12.6	0.7	0.2		13
38	棺内	鉄鏃	長頸鏃	鏃身部～頸部	14.0	1.0	不明	布目痕あり、錆著しい	
39	棺内	鉄鏃	長頸鏃	頸部～茎部	7.0	0.6	0.4		
40	棺内	鉄鏃	長頸鏃	鏃身部～頸部	12.8	0.9	0.4	頸部厚計測	16
41	棺内	鉄鏃	長頸鏃	完形	15.7	0.8	0.3	錆著しい	
42	棺外	刀子			5.6	1.6	0.3	確認調査報告、稿厚計測	

第3表 野地古墳主体部A出土鉄製品観察表

No.	取上位置	名称	分類	部位	残存長	残存幅	残存厚	備考	図面No.
1	棺内	鉄鏃	不明	不明	3.9	0.6	0.4		
2	棺内	鉄鏃	不明	不明	3.8	0.5	0.5		
3	棺内	鉄斧		完形	10.6	5.4	3.3	袋部厚計測	33
4	棺内	ヤリガンナ		ほぼ完形	29.1	1.2	0.2		34
5	棺内	鉄鏃	圭頭鏃	鏃身部～頸部	6.2	2.0	0.2		25
6	棺内	鉄剣	短剣	剣先欠損	32.7	4.2	0.6		35
7	棺内	鉄剣		完形	75.9	4.0	0.5		36
8	棺内	鉄鏃	長頸鏃	完形	18.9	0.8	0.35	片刃逆刺 稿厚計測	31
9	棺内	鉄鏃	長頸鏃	完形	18.0	1.3	0.3	錆著しい	
10	棺内	鉄鏃	長頸鏃	完形	18.4	1.0	不明	錆著しい	
11	棺内	鉄鏃	長頸鏃	鏃身部～頸部	12.5	0.9	0.3	片刃逆刺、稿厚を計測	
12	棺内	鉄鏃	長頸鏃	完形	19.2	1.0	0.2	長三角形の関部に逆刺	27
13	棺内	鉄鏃	長頸鏃	頸部～茎部	6.1	1.1	0.5		
14	棺内	鉄鏃	長頸鏃	ほぼ完形	15.3	0.9	0.3	片刃逆刺、稿厚を計測	29
15	棺内	鉄鏃	長頸鏃	完形	16.2	0.7	0.3	片刃逆刺、稿厚を計測	
16	棺内	鉄鏃	長頸鏃	完形	12.6	1.0	0.5	片刃逆刺、稿厚を計測	30
17	棺内	鉄鏃	長頸鏃	鏃身部～頸部	5.7	0.9	不明	片刃逆刺、稿厚を計測	
18	棺内	鉄鏃	長頸鏃	鏃身部～頸部	9.6	0.8	0.4	片刃逆刺、稿厚を計測	
19	棺内	鉄鏃	長頸鏃	鏃身部～頸部	10.2	0.9	0.4	片刃逆刺、稿厚を計測	
20	棺内	鉄鏃	長頸鏃	完形	17.5	1.1	不明	長三角形の関部両側に逆刺	
21	棺内	鉄鏃	長頸鏃	完形	20.5	1.0	不明	長三角形？	
22	棺内	鉄鏃	長頸鏃	頸部～茎部	9.5	0.6	0.5		
23	棺内	鉄鏃	長頸鏃	鏃身部～頸部	7.9	1.1	0.3	三角形？	
24	棺内	鉄鏃	長頸鏃	頸部	9.9	0.5	0.4		
25	棺内	鉄鏃	長頸鏃	鏃身部～頸部	12.2	1.0	0.4	片刃逆刺、稿厚を計測	
26	棺内	鉄鏃	長頸鏃	完形	16.1	1.2	0.65	三角形 刃部剥離 頸部厚計測	28
27	棺内	鉄鏃	長頸鏃	頸部～茎部	8.8	0.4	0.4		
28	棺内	鉄鏃	長頸鏃	鏃身部・頸部・茎部	3.8	0.8	0.3	片刃逆刺、稿厚を計測	
29	棺内	鉄鏃	長頸鏃	頸部	4.1	0.7	0.5		
30	棺内	鉄鏃	長頸鏃	頸部	8.0	0.6	0.4		
31	棺内	鉄鏃	長頸鏃	頸部	8.2	0.7	0.5		
32	棺内	鉄鏃	長頸鏃	鏃身部～頸部	11.3	1.05	0.2	長三角形の関部両側に逆刺	26
33	棺内	鉄鏃	長頸鏃	鏃身部～頸部	12.2	0.9	0.3	片刃、稿厚を計測	
34	棺内	鉄鏃	長頸鏃	鏃身部～頸部	3.0	1.3	0.4	長三角形の関部両側に逆刺、鏃身部のみ計測	
35	棺内	鉄鏃	長頸鏃	頸部～茎部	7.5	0.7	0.5		
36	棺内	鉄鏃	長頸鏃	鏃身部～頸部	16.9	0.9	0.3	片刃逆刺、稿厚を計測	32
37	棺内	鉄鏃	長頸鏃	頸部～茎部	13.5	0.5	0.4		
38	棺内	鉄鏃	長頸鏃	鏃身部～頸部	14.0	1.1	0.3	長三角形？	

第4表 野地古墳主体部B出土鉄製品観察表

No.	取上位置	種別	材質	出土地	最長	最径	最厚	最量	色調	図面番号
1	棺内	勾玉	蛇文岩	主体部A	3.6	—	1.1	9.7	緑色	19
2	棺内	小玉	ガラス	主体部A	0.5	0.2	0.35	0.1以下	青色	20
3	棺内	小玉	ガラス	主体部A	0.4	0.15	0.3	0.1以下	青色	21
4	棺内	小玉	ガラス	主体部A	0.7	0.1~0.2	0.4	0.2	紺色	22
5	棺内	小玉	ガラス	主体部A	0.5	0.1~0.2	0.4	0.1	青色	23
6	棺内	小玉	ガラス	主体部A	0.6	0.1~0.2	0.55	0.2	青色	24
7	棺内	小玉	ガラス	主体部A	0.8	0.15~0.2	0.4	0.3	紺色	
8	棺内	小玉	ガラス	主体部A	0.7	0.2	0.4	0.3	紺色	
9	棺内	小玉	ガラス	主体部A	0.6	0.1~0.2	0.4	0.2	紺色	
10	棺内	小玉	ガラス	主体部A	0.7	0.15~0.2	0.4	0.2	紺色	
11	棺内	小玉	ガラス	主体部A	0.6	0.2~0.25	0.4	0.1	青色	
12	棺内	小玉	ガラス	主体部A	0.55	0.1~0.2	0.4	0.1	青色	
13	棺内	小玉	ガラス	主体部A	0.7	0.1~0.2	0.5	0.2	紺色	
14	棺内	小玉	ガラス	主体部A	0.75	0.2~0.3	0.4	0.2	紺色	
15	棺内	小玉	ガラス	主体部A	0.7	0.15~0.2	0.5	0.2	紺色	
16	棺内	小玉	ガラス	主体部A	0.6	0.2	0.4	0.1	紺色	
17	棺内	小玉	ガラス	主体部A	0.7	0.2	0.5	0.3	紺色	
18	棺内	小玉	ガラス	主体部A	0.8	0.2	0.4	0.2	紺色	
19	棺内	小玉	ガラス	主体部A	0.75	0.15~0.2	0.5	0.3	紺色	
20	棺内	小玉	ガラス	主体部A	0.65	0.15~0.2	0.5	0.2	紺色	
21	棺内	小玉	ガラス	主体部A	0.6	0.1~0.15	0.5	0.2	紺色	
22	棺内	小玉	ガラス	主体部A	0.7	0.15~0.2	0.45	0.2	紺色	
23	棺内	小玉	ガラス	主体部A	0.7	0.2~0.25	0.5	0.2	紺色	
24	棺内	小玉	ガラス	主体部A	0.7	0.2~0.25	0.3	0.2	紺色	
25	棺内	小玉	ガラス	主体部A	0.7	0.15~0.2	0.6	0.3	紺色	
26	棺内	小玉	ガラス	主体部A	0.55	0.15	0.45	0.1	青色	
27	棺内	小玉	ガラス	主体部A	0.5	0.15	0.5	0.2	青色	
28	棺内	小玉	ガラス	主体部A	0.6	0.15	0.5	0.3	紺色	
29	棺内	小玉	ガラス	主体部A	0.6	0.1~0.2	0.4	0.2	青色	
30	棺内	小玉	ガラス	主体部A	0.5	0.1~0.2	0.4	0.2	紺色	
31	棺内	小玉	ガラス	主体部A	0.6	0.15~0.2	0.3	0.2	紺色	
32	棺内	小玉	ガラス	主体部A	0.7	0.15~0.2	0.5	0.3	紺色	
33	棺内	小玉	ガラス	主体部A	0.8	0.2~0.3	0.4	0.3	紺色	
34	棺内	小玉	ガラス	主体部A	0.4	0.15	0.2	0.1	青色	

No.	取上位置	種別	材質	出土地	最長	最径	最厚	最量	色調	図面番号
1	棺内	管玉	緑色岩	主体部B	1.25	0.1~0.15	0.5	0.2	緑灰色	37
2	棺内	管玉	緑色岩	主体部B	1.7	0.2~0.4	0.35	0.2	緑灰色	38

第5表 野地古墳主体部A・B出土玉類観察表

## 第5章 ま と め

今回発掘調査された野地古墳は、墳丘の消失、周溝の一部消失、調査範囲の制限、竹根等の激しい攪乱と、非常に厳しい条件での発掘調査となった。しかしながら、主体部が残存していたことは幸いで、またより多くの情報を提供してくれる古墳となった。

1つは、同一墳に2つの主体部（主体部A・B）を伴うという点である。この両主体部は主体部の位置、検出レベル、副葬品の状況から若干ではあるが時期差が生じると判断される。2つ目は、主体部Aに二体埋葬の可能性があるという点である。調査後の整理が未完ではあるが、現在まで確認できることからそれぞれ検証を試みたいと思う。

### 第1節 主体部A・Bの時期差の検証

主体部A・Bとも非常に豊富な副葬品を伴っており、特に鉄製品の多さは特筆される。ここでは鉄鏃の形式に着目し検証を試みたい。鉄鏃の形式分類・検証については杉山秀宏氏編年の「古墳時代の鉄鏃について」を指標とした。

まず、主体部A出土の鉄鏃であるが、柳葉鏃と長頸鏃に分類できる。この柳葉鏃は刃部側線が内方になだらかに降りていき、鏃身部の長身化がみられる。長頸鏃は鏃身部に2つの形式がみられる。1つは刃部が長三角形を呈する部類である。もう1つは三角形を呈する部類である。主体部Aはこれらの3パターンに分類できる。

次に主体部B出土の鉄鏃であるが、圭頭鏃と長頸鏃に分類できる。圭頭鏃は1点であり残りすべて長頸鏃に分類される。長頸鏃は鏃身部に4つの形式がみられる。1つは主体部Aからも出土した刃部が長三角形を呈する部類である。2つ目は長三角形を呈すが、鏃身関部に逆刺を有する部類である。3つ目は主体部Aからも出土した刃部が三角形を呈する部類である。4つ目は主体部Bにのみ見られる刃部が片刃を呈する部類で、なおかつ逆刺を有する部類である。主体部Bはこれらの5パターンに分類できる。

野地古墳では長頸鏃のみが両主体部から出土しているため、この長頸鏃の鏃身の形式から比較した。まず主体部A・B出土の長三角形を呈する部類は、古墳時代中期中頃に比定される。また、同じく主体部A・B出土の三角形を呈する部類は中期後半に比定される。主体部B出土の長頸鏃で鏃身が長三角形を呈し関部に逆刺を有する部類は、古墳時代後期前半に比定される。片刃で逆刺を有する部類は古墳時代中期後半～後期前半に比定される。このことから主体部Aは古墳時代中期後半、主体部Bは後期前半と時期差が生じると判断される。

次に両主体部の位置と検出レベルの相違から検証を述べる。周溝の復元と主体部の位置を比較すると、主体部Aが本墳のほぼ中央に位置し、また主体部A・Bが平行に並ばないことが確認できる。この他、検出面及び、木棺の検出レベルが相違していることも確認できる。

以上、副葬された鉄鏃の形式及び主体部の位置関係から推察すると、本墳は主体部Aを中心に古墳時代中期後半に造築され、その後主体部Bが後期前半に築かれた追葬儀例の行われた古墳であると判断される。

延岡市では多くの古墳が点在しており、古くは大正年間から古墳調査が実施されてきた。記録を紐解くと主体部を2ヶ所伴う古墳として、延岡市檜山町に所在する県指定史跡第18号墳（七曲古墳）と野地古墳近隣の地蔵ヶ森古墳の2基が挙げられる。両墳とも記録は乏しいが同一墓域内に埋葬されていると見られ、野地古墳のように時期差の生じる追葬儀例の行われた古墳は、延岡市にお

いて初めてのケースとなる。

## 第2節 主体部Aにおける二体埋葬の検証

主体部Aは確認調査により一部破壊を受けたが、木棺直葬であり木棺の長さは約3.6mを測る。出土遺物は棺の中央及び東西端に見られ、特に西端に集中して見られる。西端からは鉄剣、鉄鏃東等の鉄製品、勾玉や多数の小玉が出土していることから、西頭とした一体の埋葬と判断することができる。しかしそう判断した場合に若干の疑問が生じた。1つは西頭埋葬である。これまでの調査からそのような事例はなかったためである。もう1つは遺物の出土状況である。西頭埋葬として置かれた鉄剣の切先は足元を向くのに対して、中央付近に置かれた鉄剣、短剣は切先が西を向くのである。また1点ではあるが小玉の出土も気にかかった。

延岡市で同一木棺内に二体埋葬の事例は、野地古墳から南方約1.1kmの丘陵に展開する国史跡南方古墳群第39号墳(浄土寺山古墳<大貫支群>)がその可能性を持つ。記録では木棺の長さ等の記録はないが、写真資料から非常に長い木棺で、また遺物の出土状況が東西に集中していたとある。

今回の調査では予算的な面もあり、木棺内の土壌分析を実施することができなかった。そのため確実な事ではないため、二体埋葬の可能性があるという程度に留めておくが、二体埋葬を示唆する例としては2例目となる。

## 第3節 終わりに

南方古墳群野地支群にある古墳は、第34号墳を首長墓とする古墳群と判断されるが、すべて未調査の古墳であるためその他の支群との前後関係や勢力関係など詳細が不明であった。野地古墳は出土遺物等から古墳時代中期後半の築造と見られ、第34号墳から引き続き系譜を辿るものと推察される。しかしながら、指標とした鉄鏃の分類が十分に行われていないこと、また須恵器の時代検証が不十分なことを考えると、些か不安が残る。

その他、特筆すべきとして出土遺物の1つである勾玉の出土が挙げられる。延岡市ではこれまで6例の出土記録があるが、調査例が古いことや戦前戦後の動乱や、市の機構改革による施設改変等により遺物が散逸してしまった。そのため現存する物は1つしかなく、今回の勾玉は非常に貴重な資料となった。

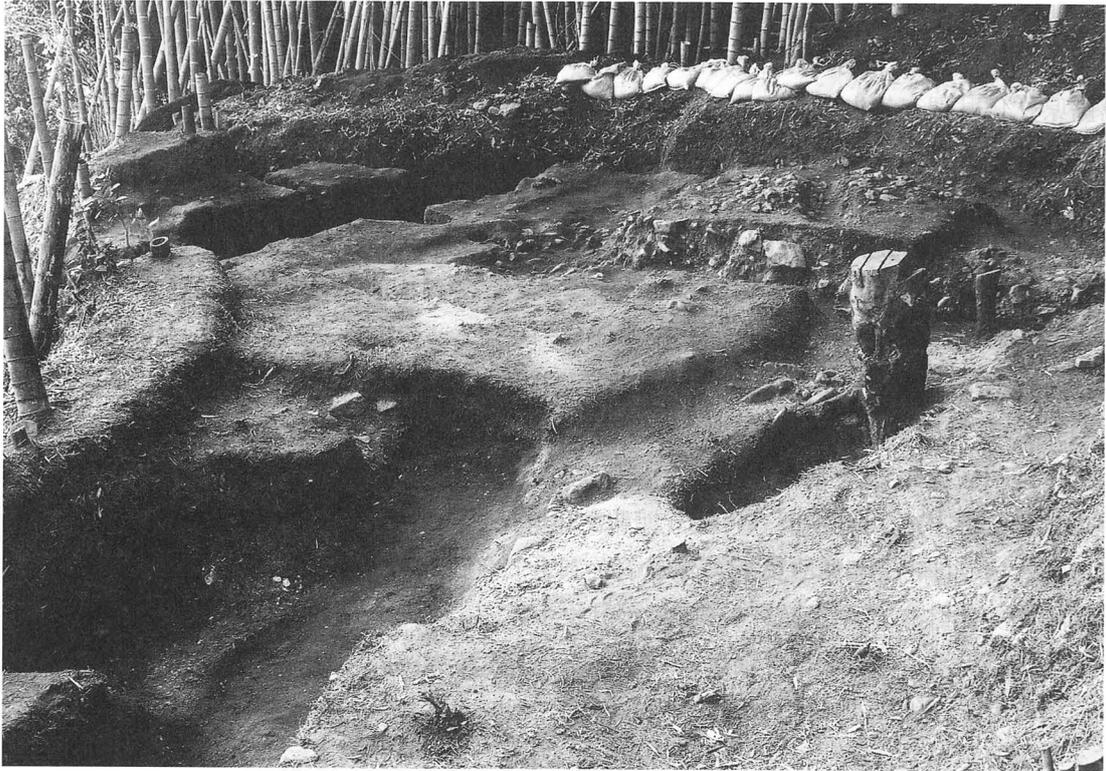
これまで延岡市で行われた古墳調査により出土した遺物は、資料整理が遅れている状況にあり、今後は整理・検証を進め各古墳の年代把握や、古墳群の歴史的な位置付けの解明を行っていかねばならない。さらには、市内に分布する古墳群の歴史的な背景の解明に努めていかねばならないと考える。

野地古墳は、非常に多くの情報を提供してくれる古墳であったが、調査地の環境、時間的制約や調査担当者の力量不足により十分な調査・報告ができていない。さらに、検討を進めて行き機会を設け報告しなければならないと考える。

最後になりますが、今回の調査・資料整理にあたっては、宮崎大学教育文学部教授 柳沢一男氏、宮崎県教育庁文化課 松林豊樹氏、宮崎県埋蔵文化財センター調査第二課四係の皆様、隣町である北方町教育委員会 小野信彦氏に多大なご協力・ご指導を賜った。改めて感謝いたします。

【参考文献】

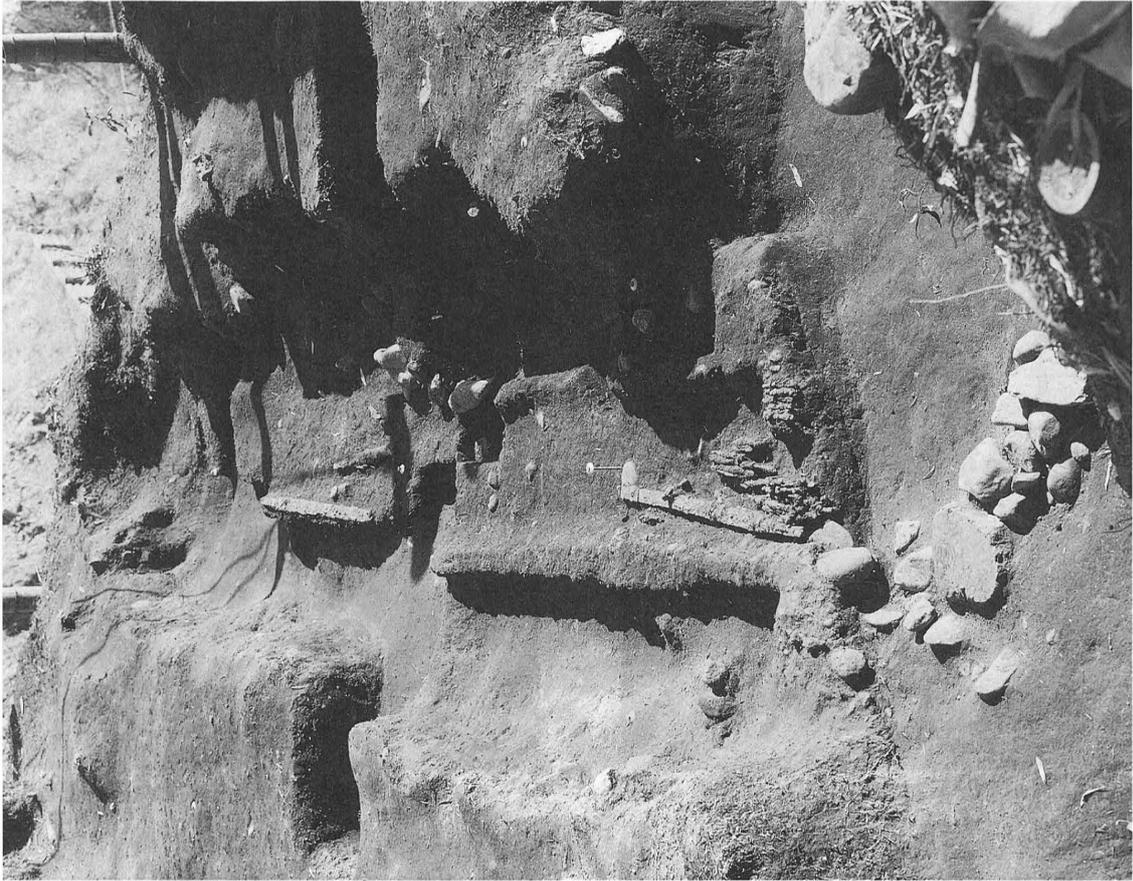
- 『上代の日向延岡』 鳥居人類學研究所 1935
- 『宮崎県文化財調査報告書 第14集』 宮崎県教育委員会 1969
- 『延岡市檜山古墳群調査報告書』 旭化成工業株式会社 延岡支社 1971
- 『史跡 南方古墳群 保存管理計画書』 延岡市教育委員会 1979
- 『野田町八田遺跡』 延岡市教育委員会 1978
- 『橿原考古学研究所論集 第八 古墳時代の鉄鏃について』 杉山秀宏 1988
- 『古墳時代の研究 8 古墳Ⅱ 副葬品』 雄山閣1991
- 『古墳時代の研究 7 古墳Ⅰ 墳丘と内部構造』 雄山閣 1992
- 『宮崎県史 資料編 考古2』 宮崎県 1993
- 『東二原地下式横穴墓群 下の平地下式横穴墓群』 小林市教育委員会 1993
- 『平成10年度 市内遺跡発掘調査に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』 延岡市教育委員会 1999
- 『鬼の窟古墳 西都原205号墳』 宮崎県教育委員会 2000
- 『延岡市の文化財』 延岡市教育委員会 2001
- 『西都原100号墳』 宮崎県教育委員会 2002
- 『外原遺跡群』 宮崎県西都市教育委員会 2003
- 『堂ヶ嶋第2遺跡』 宮崎県西都市教育委員会 2003



PL.11 野地古墳遺構検出状況



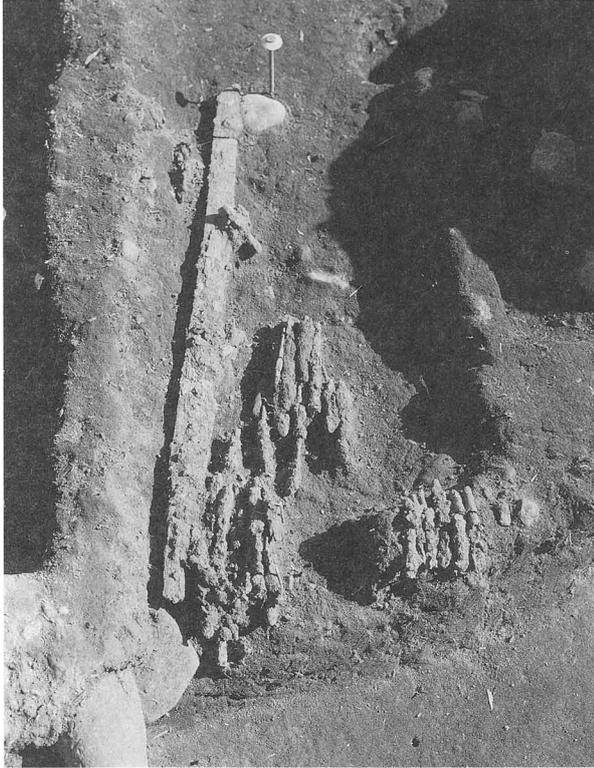
PL.12 野地古墳主体部A・B検出状況



PL.13 野地古墳主体部A検出状況



PL.14 野地古墳主体部B検出状況



PL.15 野地古墳主体部A遺物出土状況 1



PL.16 野地古墳主体部A遺物出土状況 2



PL.17 野地古墳調査地近景



PL.18 野地古墳調査風景



PL.19 野地古墳主体部A勾玉、小玉出土状況



PL.20 野地古墳主体部A土層断面



PL.21 野地古墳主体部B遺物出土狀況 1



PL.22 野地古墳主体部B遺物出土狀況 2



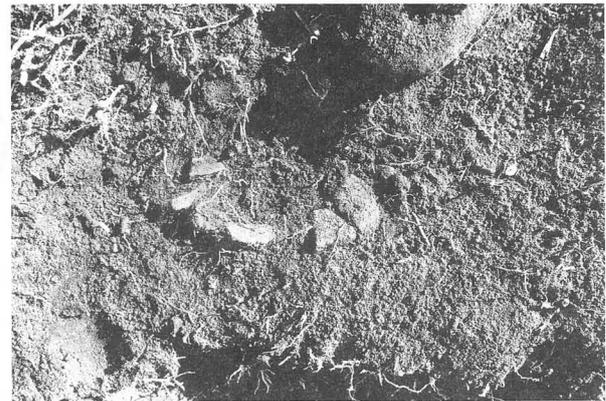
PL.23 野地古墳主体部B遺物出土狀況 3



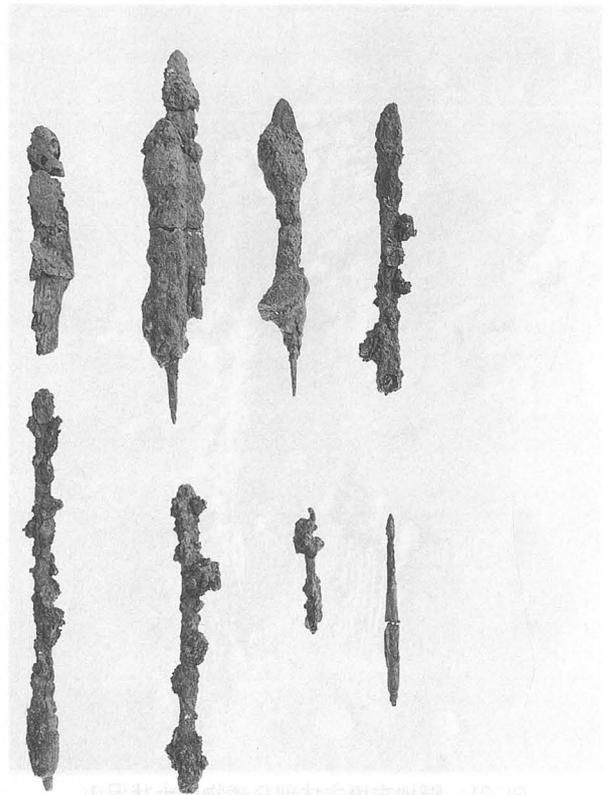
PL.24 野地古墳主体部B土層断面



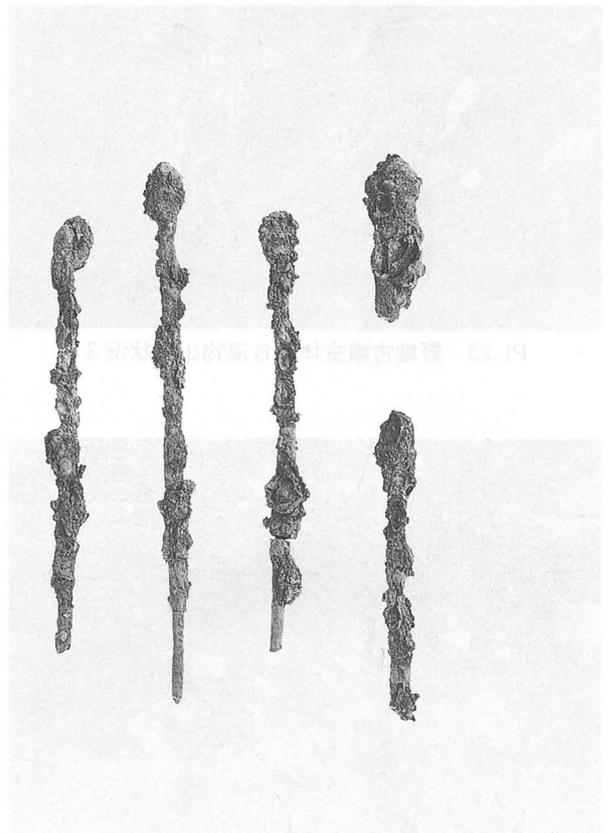
PL.25 野地古墳周溝土層断面



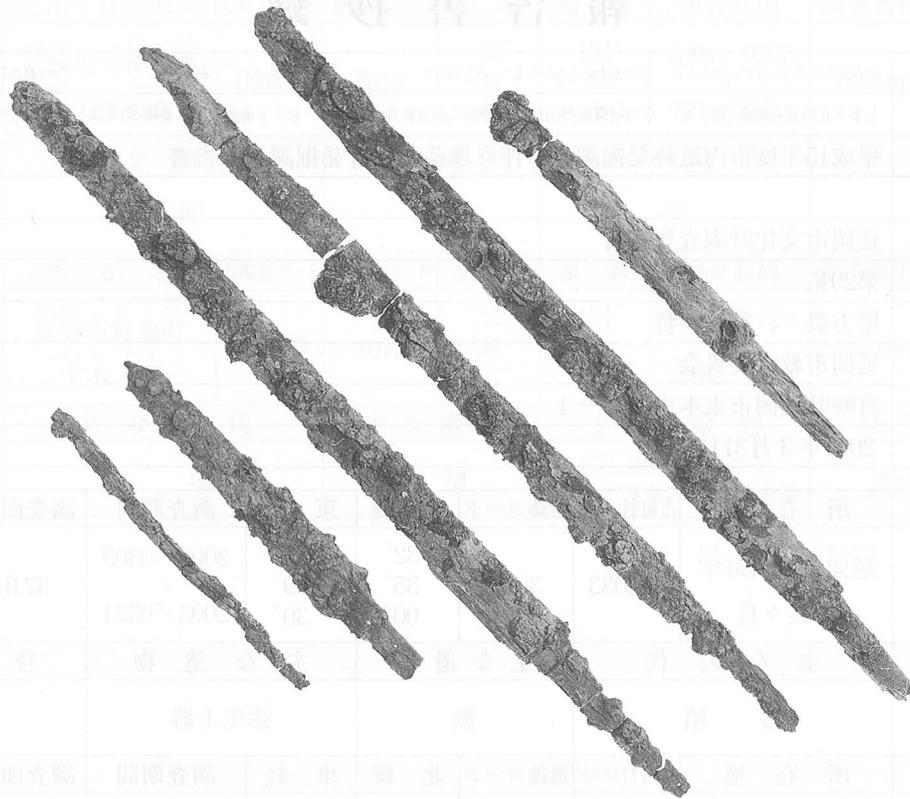
PL.26 野地古墳周溝内遺物出土狀況



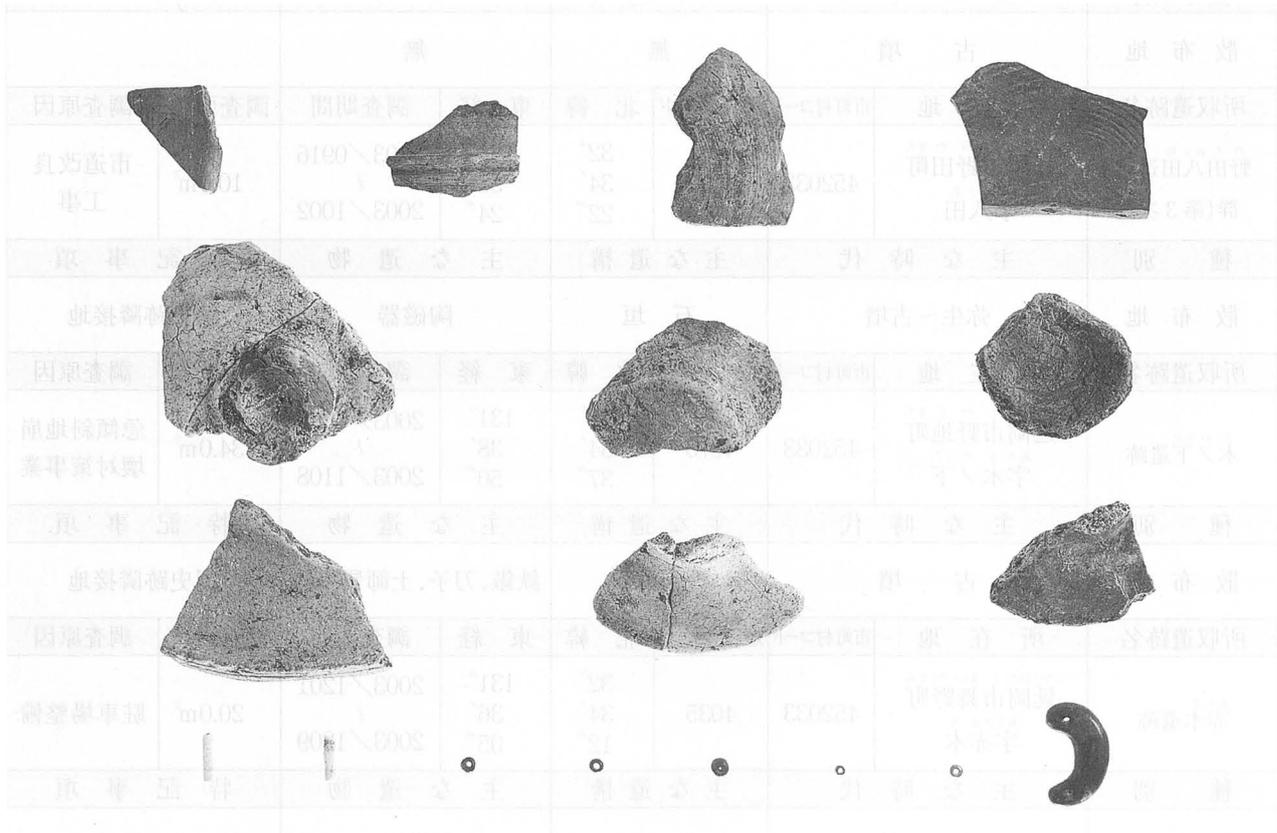
PL.27 野地古墳主体部A出土遺物（上段左3は棺外）



PL.28 野地古墳主体部B出土遺物



PL.29 野地古墳主体部A・B出土遺物（右上3は主体部A）



PL.30 野地古墳周溝内出土遺物及び主体部A・B出土玉類

# 報告書抄録

ふりがな	かみたたらはこしきせつかんぐん なかがわらえもんやま のたはった きのした あかぎ のべおかじょうない のじ
書名	上多々良箱式石棺群(第2次) 中川原町衛門山地点 野田八田遺跡群(第3次) 木ノ下遺跡 赤木遺跡(第9次) 延岡城内遺跡(第10次) 野地古墳
副書名	平成15年度市内遺跡発掘調査に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
巻次	
シリーズ名	延岡市文化財調査報告書
シリーズ番号	第29集
著者名	尾方農一、高浦 哲
編集機関	延岡市教育委員会
所在地	宮崎県延岡市東本小路2-1
発行年月日	2004年3月31日

所収遺跡名	所在地	市町村コード	遺跡コード	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
かみたたらはこしき 上多々良箱式 せつかんぐん 石棺群(第2次)	のべおかしふるかわまちあざ 延岡市古川町字 かみたたら 上良々良	452033	3012	32° 35' 00"	131° 39' 30"	2003/0303 } 2003/0324	32.6m <sup>2</sup>	区画整理
種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項		
散布地	古墳	無		弥生土器				
所収遺跡名	所在地	市町村コード	遺跡コード	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
なかがわらまち 中川原町 えもんやま 衛門山地点	のべおかしなかがわらあざ 延岡市中川原字 えもんやま 衛門山	452033		32° 35' 23"	131° 40' 22"	2003/0422 } 2003/0430	133.0m <sup>2</sup>	病院建設
種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項		
散布地	古墳	無		無				
所収遺跡名	所在地	市町村コード	遺跡コード	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
のたはった 野田八田遺跡 群(第3次)	のべおかしのたまち 延岡市野田町 あざはった 字八田	452033	4072	32° 34' 22"	131° 38' 24"	2003/0916 } 2003/1002	10.0m <sup>2</sup>	市道改良 工事
種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項		
散布地	弥生～古墳	石垣		陶磁器		国史跡隣接地		
所収遺跡名	所在地	市町村コード	遺跡コード	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
きのした 木ノ下遺跡	のべおかしのじまち 延岡市野地町 あざきのした 字木ノ下	452033	4073	32° 34' 37"	131° 38' 50"	2003/1007 } 2003/1108	34.0m <sup>2</sup>	急傾斜地崩 壊対策事業
種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項		
散布地	古墳	円墳		鉄鏃、刀子、土師質土器		国史跡隣接地		
所収遺跡名	所在地	市町村コード	遺跡コード	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
あかぎ 赤木遺跡	のべおかしまいのまち 延岡市舞野町 あざあかぎ 字赤木	452033	4035	32° 34' 12"	131° 36' 05"	2003/1201 } 2003/1209	20.0m <sup>2</sup>	駐車場整備
種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項		
散布地	古墳	周溝		須恵器		国史跡隣接地		

所収遺跡名	所在地	市町村コード	遺跡コード	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
のべおかしょうない 延岡城内遺跡 (第10次)	のべおかしてんじんこうじ 延岡市天神小路 あざてんじんこうじ 字天神小路	452033	3018	32° 34′ 40″	131° 39′ 39″	2004/0202 } 2004/0224	200.0m <sup>2</sup>	宅地造成
種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項		
城館跡	近世	無		無				
所収遺跡名	所在地	市町村コード	遺跡コード	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
のじこふん 野地古墳	のべおかし のじまち 延岡市野地町 あざきのした 字木ノ下	452033	4073	32° 34′ 37″	131° 38′ 50″	2003/1126 } 2004/0110	55.0m <sup>2</sup>	急傾斜地崩 壊対策事業
種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項		
散布地	古墳	円墳		直刀、鉄剣、鉄鏃、刀子、 鉄斧、ヤリガンナ、須恵器等		国史跡隣接地		

平成15年度市内遺跡発掘調査に伴う  
埋蔵文化財調査報告書

延岡市文化財調査報告書第29集

2004年3月31日

発行 延岡市教育委員会

宮崎県延岡市東本小路2-1

印刷 有限会社 河野印刷

宮崎県延岡市川原崎町453